nijiVOICE 2023 報告書

LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査 2023年 12月



内容

- l. <u>エグゼクティブ サマリー</u>
- Ⅱ. 謝辞
- Ⅲ. 背景
- IV. <u>主な調査結果</u>
- V. <u>調査テーマ</u>
 - I. <u>属性</u>
 - Ⅱ. 学校や仕事
 - Ⅲ. <u>財政</u>
 - IV. <u>社会</u>
 - V. <u>健康</u>
 - VI. <u>パートナーシップ登録</u>
- VI. <u>付記</u>





エグゼクティブ サマリー

LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査「nijiVOICE2023」の報告書を作成いたしました。回答いただいた皆さま、分析、広報等にご協力いただいた皆さまに心より感謝いたします。

LGBTQの権利獲得に関して、2023年は大きな前進がありました。「LGBT理解増進法」が成立し、職場や学校におけるLGBTQへの取り組みが努力義務になりました。また、地方自治体のパートナーシップ登録制度の人口カバー率はついに70%以上となりました。さらに、「GID特例法」の不妊要件を違憲とした最高裁判決があり、婚姻平等を求める「結婚の自由をすべての人に」裁判においては、札幌、東京に続いて、名古屋地裁、福岡地裁で違憲判決が出ました。

しかし、こうした社会の変化が、一人ひとりのLGBTQの置かれた状況の改善には必ずしも繋がっていません。LGBTQの孤立、孤独、心身の健康における格差、経済的格差といった問題は、依然として解決されておらず、COVID-19のパンデミックからの回復も道半ばの中、世界の紛争とそれに伴う資源高騰、気候変動や自然災害などによる危機は、社会的マイノリティであるLGBTQにより大きな負の影響を与えていると思われます。

今回の「nijiVOICE2023」では、どうしたらLGBTQの心身の健康、社会的健康を回復できるのか、に焦点をおいて分析を行いました。私たちは、このデータを、日本社会においてLGBTQに関する施策をより一層推進する材料にして頂きたいと思います。

なお、本調査は認定NPO法人虹色ダイバーシティが自費で行っています。LGBTQに関するデータは、まだまだ不足しており、当事者たちのリアルな声を集めたこの調査が、国や学術研究グループのさらなる調査の呼び水になれば、とも思っております。私たちの活動に、是非ご支援をお願いいたします。

認定NPO法人 虹色ダイバーシティ 理事長 村木 真紀



謝辞

「nijiVOICE2023」にご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

調査主体

理事長 村木 真紀

認定NPO法人虹色ダイ バーシティ

協力研究者

助教 平森 大規

法政大学 グローバル教養学部

助教 三上純

大阪大学大学院 人間科学研究科

博士前期課程 山脇 佳

大阪大学大学院 人間科学研究科

報告書執筆

客員研究員 テイラー・ハミルトン Henry Luce財団

回答者の皆さま

LGBTQとアライのコ ミュニティの皆さま 協賛企業の皆さま

参考

一般社団法人 社会調査 支援機構チキラボ



虹色ダイバーシティについて

虹色ダイバーシティは2013年に法人化した、大阪市に本拠を置く認定NPO法人です

Mission: Bridging the gaps for diversity and inclusion.

SOGI (Sexual Orientation, Gender Identity) による格差のない社会をつくり、次世代に繋ぎます。 LGBTQ等の性的マイノリティとその家族、アライの尊厳と権利を守り、誰ひとり取り残さない社会の実現に貢献します。そのために、

EDUCATION 広く情報発信して、

RESEARCH データ・事実・地域での実践を蓄積し、

ADVOCACY ビジネス活動・公共政策・法律 を変えていきます。

https://nijiirodiversity.jp/aboutus

背景

調査の目的、方法、サンプル構成の概要



調査の目的

日本では、職場や社会でカミングアウトするLGBTQ(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クィア or クエスチョニングの頭文字)等の性的マイノリティ当事者(以下、LGBTQと表記)がまだ少ないため、どのような困難があり、どのようなニーズを抱えているのかについて、把握することが難しい。国による調査も非常に少ないという現状がある。

【このアンケートの目的】

ダイバーシティ施策全体も視野に入れつつ、性的マイノリティも働きやすい職場づくり、生きやすい社会づくりを推進するための日本のデータを積み上げる。

近年進んでいる企業や行政のLGBTQ施策の効果を確認する。

報告会実施後に、個人情報を削除したデータを公開することで、学術目的の二次分析を可能にする(回答者が類似した調査を何度も受けることによる負担を軽減するとともに、この調査の成果を広く社会に還元する)。



調査の方法

- ウェブ上のアンケートフォームを利用 (SurveyMonkey 有料版)
- 回収期間: 2023/5/21 2023/6/19 (30日間)
- 参加者: 2,304人(有効回答数: 2,242人) 累計では17,971名が参加

実施年	2014	2015	2016	2018	2019	2020	2022	2023
回答	1,815	2,154	2,298	2,348	2,587	2,231	2,296	2,242

- 全50問(すべて任意回答のため、設問によって回答数が異なる)
- ウェブサイト、X(旧Twitter)、Facebook、Instagram、 LinkedIn、講演会、プライドセンター大阪でのポスター掲示、既存の虹色ダイバーシティのクライアントへのメールマガジンでの協力依頼等で周知



SOGI分類の手法

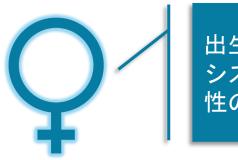
生まれの性	性自認	性的指向アイデンティティ	SOGI分類	2分類	3分類
女性	女性	同性愛者	シスL	LGBT等	シスLGB他
		異性愛者	シス異性愛者	シス異性愛者	シス異性愛者
		両性愛者・全性愛者	シスB女性	LGBT等	シスLGB他
		その他	シスその他女性	LGBT等	シスLGB他
	男性	全部	トランス男性	LGBT等	トランスジェンダー
	その他	全部	生まれ女性X	LGBT等	トランスジェンダー
男性	女性	全部	トランス女性	LGBT等	トランスジェンダー
	男性	異性愛者	シス異性愛者	シス異性愛者	シス異性愛者
		同性愛者	シスG	LGBT等	シスLGB他
		両性愛者・全性愛者	シスB男性	LGBT等	シスLGB他
		その他	シスその他男性	LGBT等	シスLGB他
	その他	全部	生まれ男性X	LGBT等	トランスジェンダー

^{*}トランスジェンダーにはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルなど様々な性的指向を含んでいます。

^{*} 今回は主に仕事や暮らしについての調査であり、現状の社会においては、性的指向よりも出生時の性別が収入等に大きく影響するのではないかという想定で、分析に当たっての分類を行いました。



代表性の検討まとめ



出生時の性別 女性 の方と シスジェンダー・ゲイ男 性の回答が多い 10代-30代

若い世代による回答が 多い



関東地方、近畿地方在住者からの回答が多い

「niji VOICE 2023」はLGBTQの経験に関する貴重な調査データであるが、調査の回答傾向を過剰に一般化することはできない。

主な調査結果

各調査テーマにおける洞察



過去の調査から継続して確認された結果

- LGBTQのメンタルヘルスは良くなく、特にトラン コ スジェンダーで顕著に悪い。
- 出生時女性であること、トランスジェンダーであることが、低学歴、非正規雇用、低収入に繋がっていると思われる。
- 職場等のLGBTQ施策によって、アライが可視化し、 相談しやすくなり、心理的安全性が高い職場に繋 がり、勤続意欲が上がる、という因果関係が想定 される。
- LGBTQ施策の数が増えるほど、職場の心理的安全性は高くなる。心理的安全性の高い職場ではカミングアウトしている人の割合も高い。
- このアンケートに回答するシスジェンダー異性愛者 はアライである率が高いが、LGBTQ当事者より差別 的言動を職場等で経験していないと回答している。
- 職場等でのジェンダーやSOGIに関するハラスメントがあると、心理的安全性が低くなる。

7

福利厚生の同性パートナーへの適用やトランスジェンダーへの対応など、当事者の実利につながる職場の施策への希望が多い。

8

アウティングがパワハラ指針に入ったものの、アウティングを実際に経験している当事者は多く、今回はトランスジェンダー男性(18%)が最多であった。

9

トランスジェンダーで健康診断の受診率が低い。

10

世帯収入を把握していないLGBTQが多い。一人暮らし(独居)の割合も高い。

11

貧困に関する経験をしているLGBTQも多い。この1年間で預金残高が1万円以下になった経験のあるトランスジェンダーは20%、シスLGB+で19%であった。



今回の調査で新たに確認された結果

- 職場等で希望するLGBTQ施策として、45%以上が法整備への支援にチェックした。理解増進法や司法判断などのニュースが多かったことが背景として考えられる。
- 2 自治体のパートナーシップ制度に登録している人 の声が100名を超えたが、人口カバ一率70%超と比 較して、実際に登録している人は少なく、何らか の形で活用している人も少ない。
- LGBTQの方が、自分を健康だと感じている割合が低い。健康に影響を与えると思われる要素:人との繋がり、運動習慣、睡眠習慣、食生活などにおいても、LGBTQとシス異性愛者で違いが見られた。
- 運動をすることへの障壁を聞くと、トランスジェンダーでは金銭的な余裕、場所や施設の問題をあげる人が多かった。
- うつ病 16%など、多くのトランスジェンダーが何らかの形で通院等をしているが、医療現場で多くのストレスを経験しており、医療関係者に「質問がしづらい」という回答も多かった。



LGBTQが相談しやすいと回答したのは友人やインターネット上のつながりであり、そこから社会的資源に繋げる活動が重要であると考えられる。



人との繋がりに関しては、シス異性愛者の方が家族や学校・職場、地域やスポーツの集まりにより参加している。LGBTQが安心して集まることのできる場として、バー等は低収入の人が行きにくく、無料で集えるコミュニティセンター等の役割は大きい。



将来を見越した投資に関しては、高収入な人の方が 関心が高かった。LGBTQフレンドリーな企業への投 資意欲はSOGIに関わらず同程度であった。



LGBTQの方が引越への希望が高い。理由は「自分らしく生きたい」が多く、今の暮らしで自分らしくいられないことが背景になっていると考えられる。

テーマ

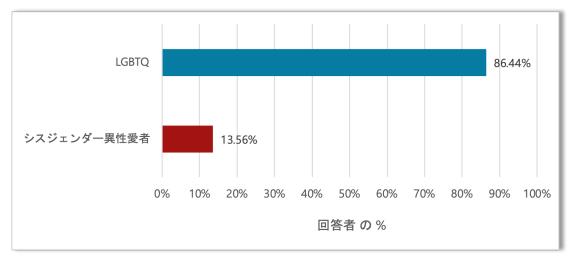
属性、学校や仕事、財政、社会、健康、パートナーシップ登録という 6つのトピックを深く掘り下げる。

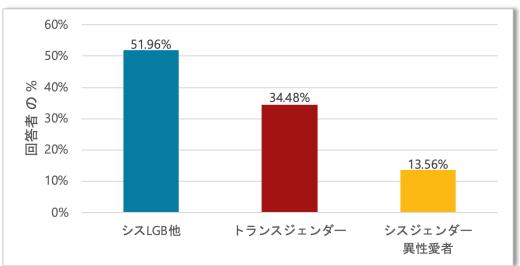
1. 回答者の属性

- 回答者の52%がシスジェンダーLGB+、34%がトランス ジェンダー、14%がシス異性愛者である(図1.1参照)
- ・ 回答者は、シスジェンダーの同性愛者(21%)、または 生まれ女性(23%)が多い(図1.2参照)
- ・ シス異性愛者の世帯はLGBTQの世帯よりも年収が高いが、 個人所得の差は出生時の性別による影響が大きい(図1.8 参照)
- ・ 回答者の47%が関東に住んでいる (図1.4参照)
- ・ 回答者の40%が15歳から30歳(図1.3参照)



図1.1 回答者のSOGI分類





調査回答者の86%がLGBTQであると認識。

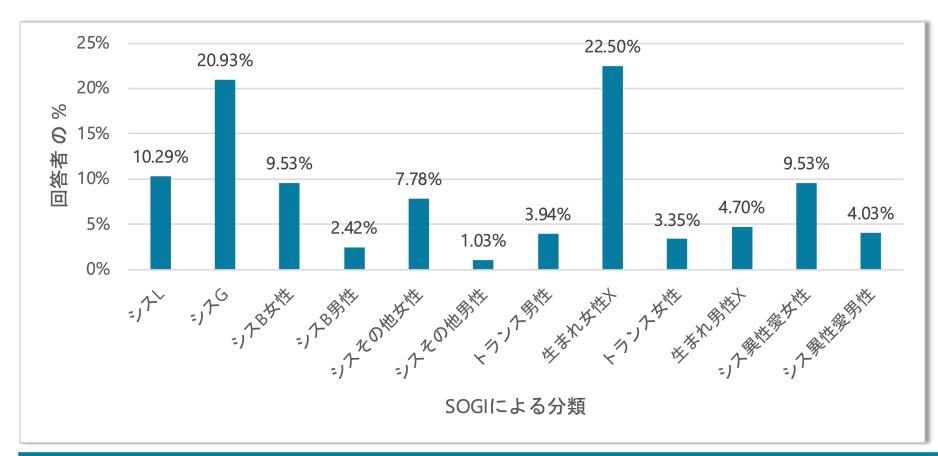
	LGBTQ	シスジェンダー異性愛者	合計
N=	1,938	304	2,242

調査回答者の52%がシスジェンダーのLGBであり、 34%がトランスジェンダーであった。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	1,165	773	304	2,242



図1.2 回答者の% x SOGI分類

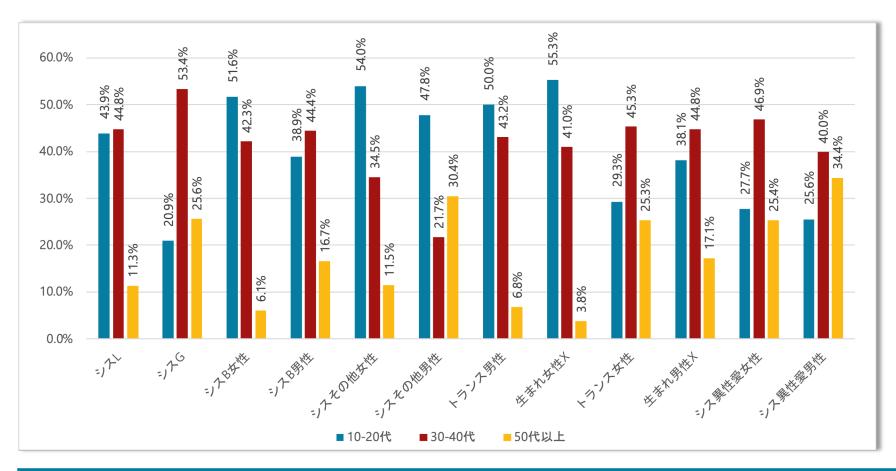


調査回答者の多くは、シスジェンダーのゲイ男性(21%)、または生まれつき女性であるXジェンダー(23%)である。

		シス G	シスB女性	シスB男性	シスその 他女性						シス異性 愛女性		合計
N=	230	468	213	54	174	23	88	503	75	105	213	90	2,236



図1.3 回答者の年代 x SOGI分類

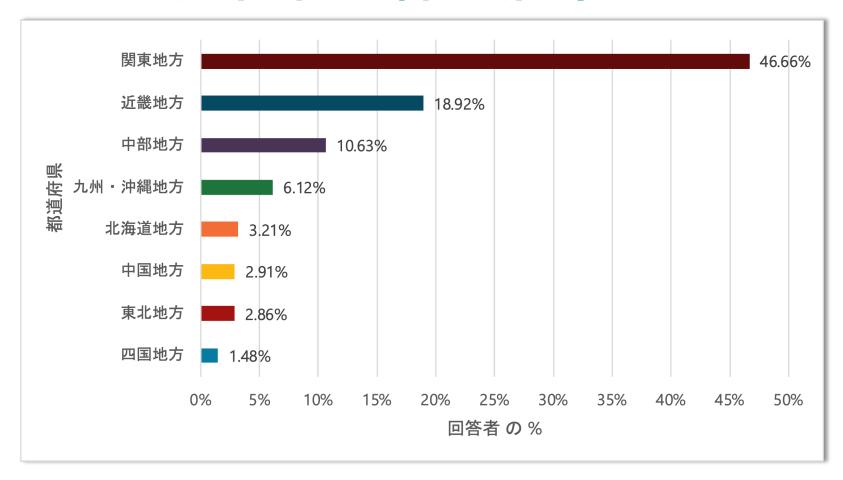


回答者全体では、15歳から 30歳が40%を占める。

			シス G	シス B 女性	シスB男性	シスその 他女性						シス異性 愛女性		合計
ı	N=	230	468	213	54	174	23	88	503	75	105	213	90	2,236



図1.4 回答者の都道府県

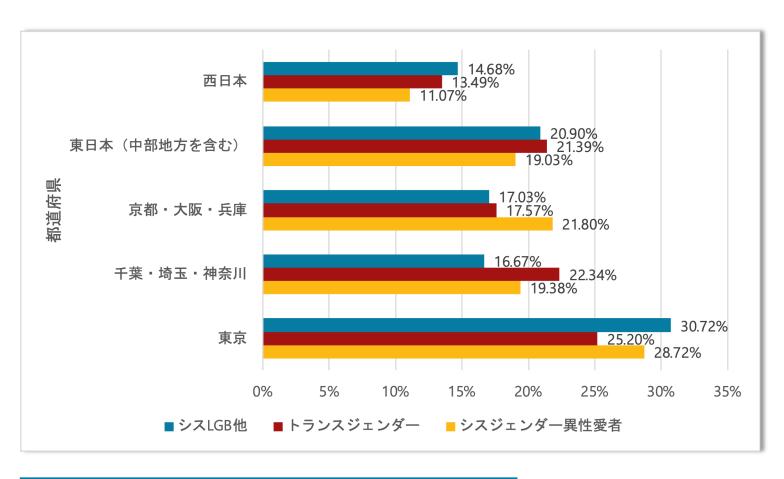


N= 2,138

関東地方在住者が47%と圧倒的に多く、近畿地方在住者は19%である。



図1.5 都道府県 x SOGI分類

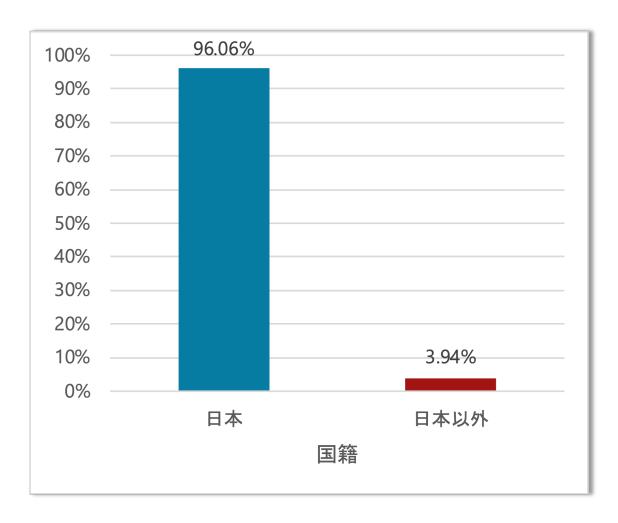


すべての属性で、回答者の4分の1以上が東京近郊に住んでいる。

	シスLGB他	トランスジェンダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	1,110	734	289	2,133



図1.6 国籍

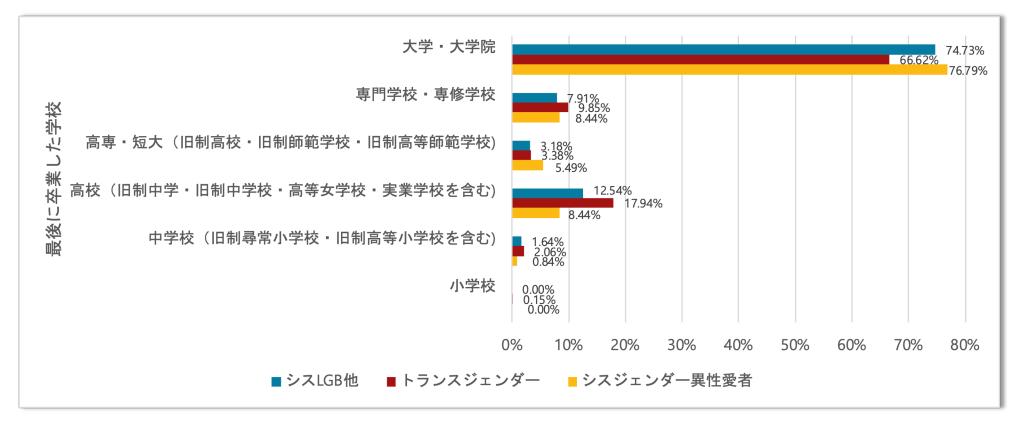


国籍	度数
日本	2,097
中国	30
米国	11
ブラジル	6
台湾	6 2
カナダ	2
香港	2
メキシコ	2 2
ニュージーランド	
ロシア	2 2
英国	
オーストラリア人	2 1
ブータン	1
フランス	1
ドイツ インド イラン イタリア	1
インド	1
イラン	1
イタリア	1
ペルー	1
フィリピン	1
韓国	1
タイ	1
ベトナム	1
日本以外	9
N=	2,183

回答者の大半は日本国籍を持っておりで、日本以外の国籍を持つ回答者は4%未満である。



図1.7 最後に卒業した学校

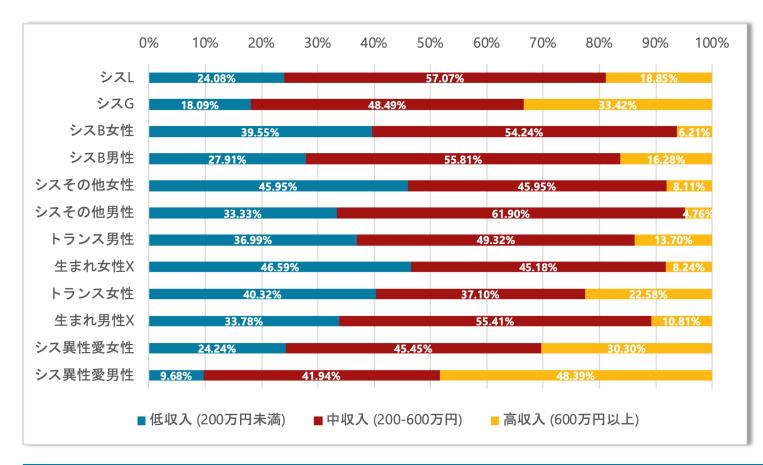


トランスジェンダー回答者の方がシスジェンダー回答者よりも学歴が低い割合が高いが、これは回答者の年齢によるものかもしれない(図1.3参照)。

	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	1,037	680	237	1,954



図1.8 本人収入

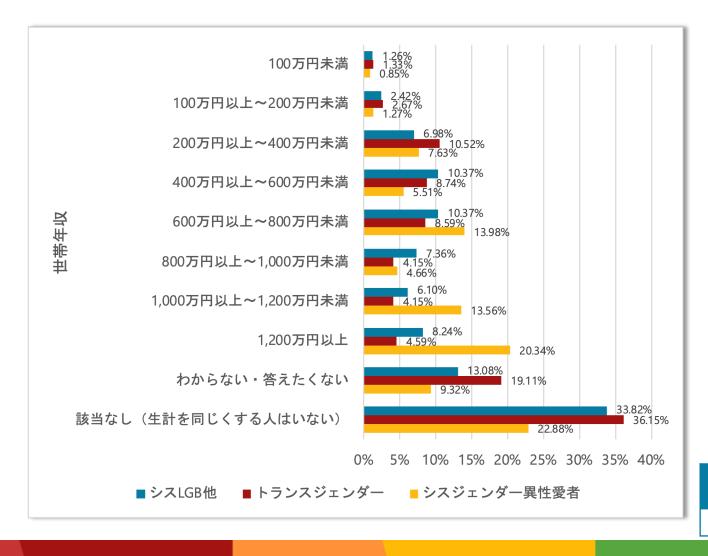


「シスB女性」、「シスその他女性」、「生まれ女性X」、「トランス女性」の各カテゴリーは、他のSOGIグループよりも所得水準が低かった。

	シス L		シス B 女性		シスその 他女性						シス異性 愛女性		合計
N=	191	398	177	43	148	21	73	425	62	74	165	62	1,839



図1.9 世帯年収



シスジェンダー異性愛者の回答者は、LGBTQの回答者よりも世帯収入が高いと報告している。

注: LGBTQ回答者の半数近くがこの質問に答えなかった(わからない、答えたくない、生計同一の人がいないなど)。

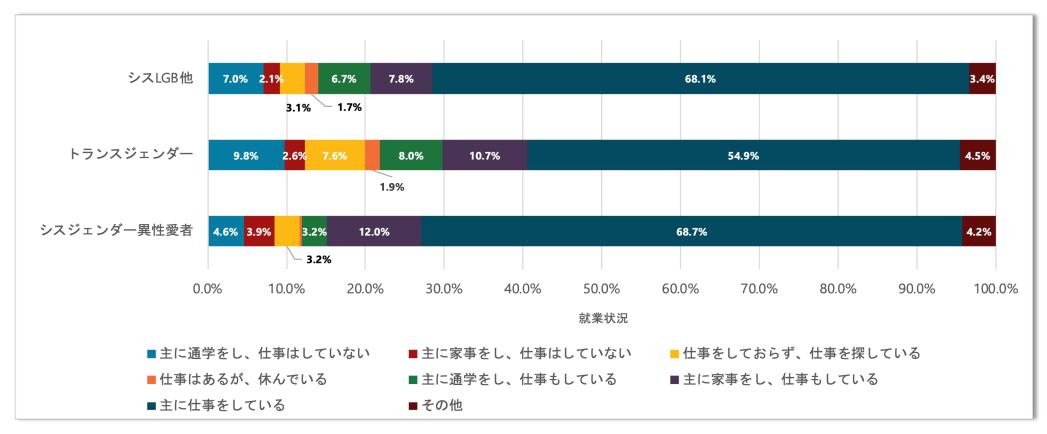
	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	1032	675	236	1,943

2. 学校や仕事の調査結果

- トランスジェンダーの回答者の4分の1がパートタイムの 仕事であり、シスジェンダーLGB+(15%)、シスジェン ダー異性愛者(11%)と差がある(図2.2参照)
- SOGIに関係なく、回答者の66%以上が職場が同性パートナーを福利厚生に含めることを望み、50%以上が差別禁止ポリシーの明確化を望み、45%以上が雇用主がLGBTQに関する法律をサポートすることを望んでいる(図2.12参照)
- トランスジェンダー男性の81%、トランスジェンダー女性の78%が職場でカミングアウトしているのに対し、シスジェンダーのレズビアンの55%、ゲイの53%は職場でカミングアウトしていない(図2.13参照)
- ・ シスジェンダー異性愛者回答者(69%)は、LGBTQの回答者よりも、職場にアライがいると考えている(図2.17参照)



図2.1 就業状況

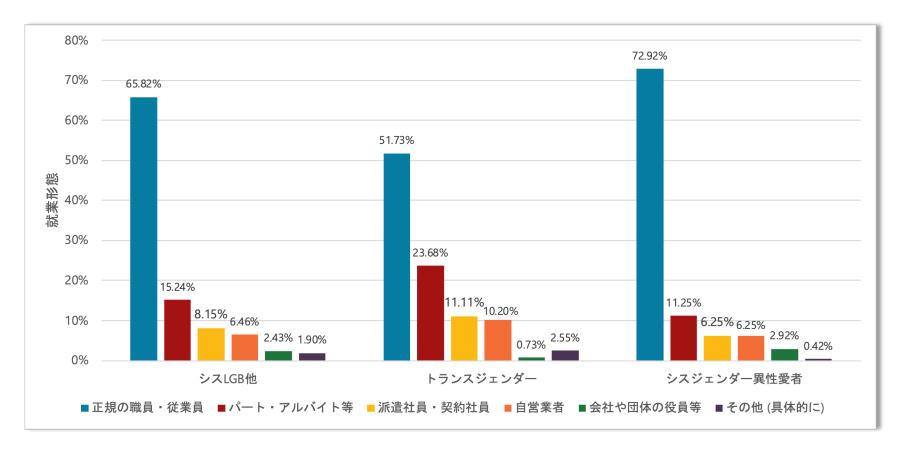


	シスLGB他	トランスジェンダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	1,124	728	284	2,136

トランスジェンダーの回答者(55%)は、シスジェンダーの回答者(68%)に比べ、就業している人が少ない



図2.2 就業形態

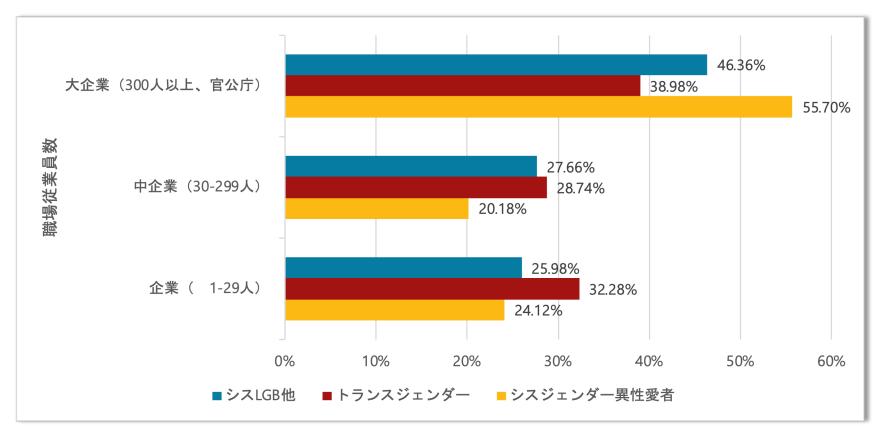


	シスLGB他	トランスジェンダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	945	549	240	1,734

トランスジェンダーの回答者(52%)は、シスジェンダーLGB+(66%)やシスジェンダー異性愛者(73%)よりも、正規雇用の割合が低い



図2.3 職場従業員数

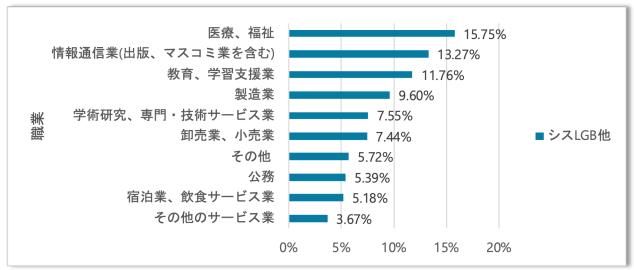


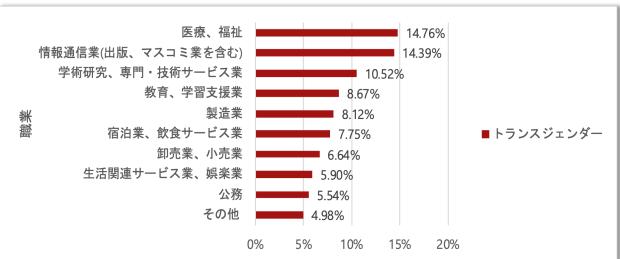
	シスLGB他	トランスジェンダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	893	508	228	1,629

本調査は大企業に所属している人からの回答が多い。しかし、トランスジェンダー (32%) は、中小企業で働いている人の割合が高い。



図2.4 職業



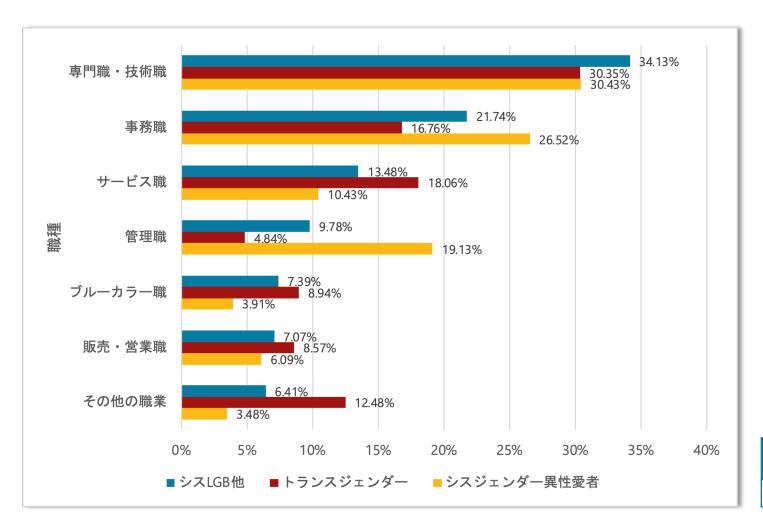


LGBTQもさまざまな業種で働いている。各カテゴリーで回答者が選んだ上位10業種を表示。

	シスLGB他	トランスジェンダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	927	542	232	1,701



図2.5 職種



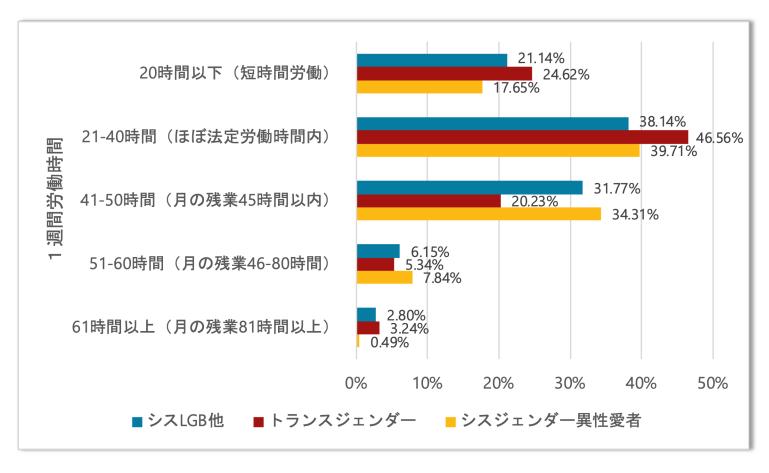
トランスジェンダーの回答者で、サービス 職、ブルーカラー職、販売・営業職の割合 が高い。

シスジェンダー異性愛者は管理職の割合が 高い。(虹色ダイバーシティの研修先に回 答を依頼しているためと思われる)

		シスジェンダー			
	シスLGB他	トランスジェンダー	異性愛者	合計	
N=	920	537	230	1,687	



図2.6 1週間の労働時間

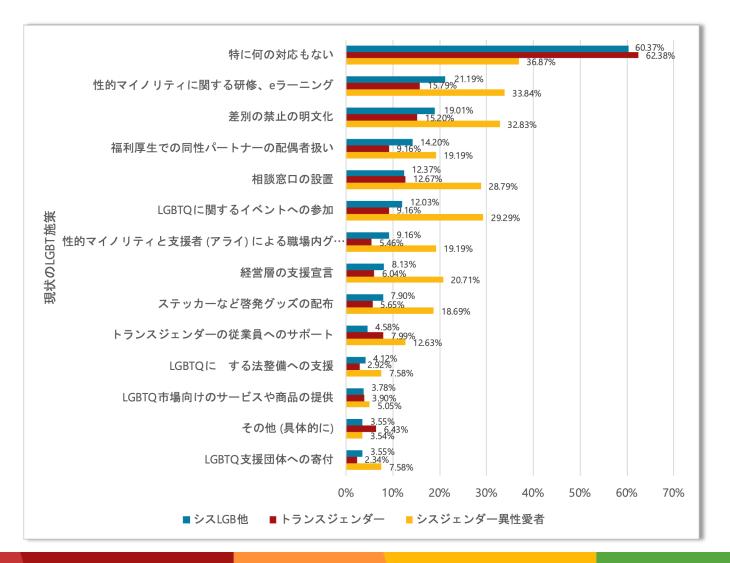


多くの回答者は、フルタイムの労働時間内で働いている。トランスジェンダーで短時間労働者が多い傾向がある。長時間労働はLGBTQの方が多い。

	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	894	524	204	1,622



図2.7 現状のLGBTQ施策



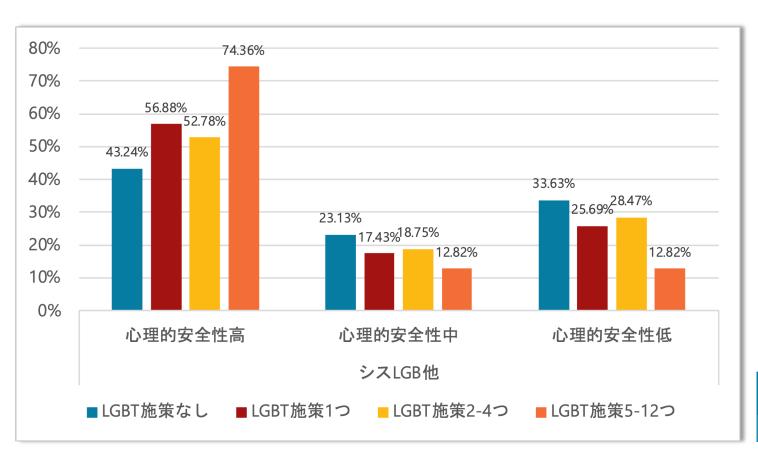
LGBTQの回答者の60%以上が、自分の職場にはLGBTQに関する施策がないと回答している。

福利厚生やトランス従業員への支援のある 職場はまだ少ない。

	シスLGB他	シ: トランスジェンダー	スジェンダー 異性愛者	合計
N=	873	513	198	1,584



図2.8 心理的安全性 x 現状のLGBT施策の 数. LGB+

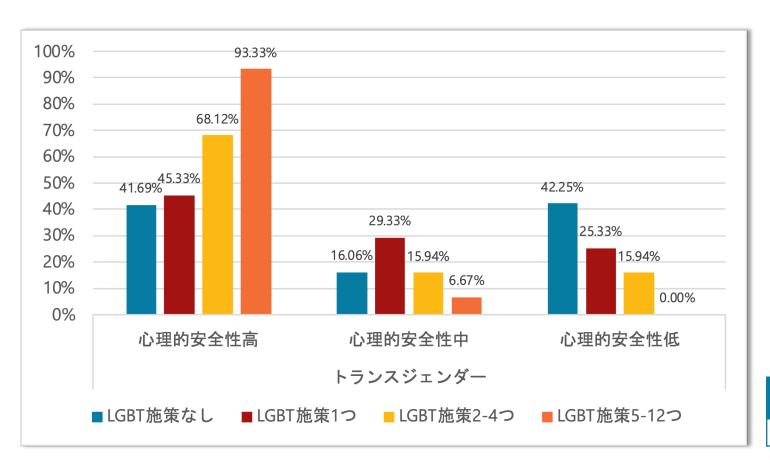


シスジェンダーLGB+では、LGBT施策 の実施数が多いほど、職場の心理的安 全性が高いと回答する人が多い。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	893	529	202	1,624



図2.9 心理的安全性 x 現状のLGBT施策の数, トランス

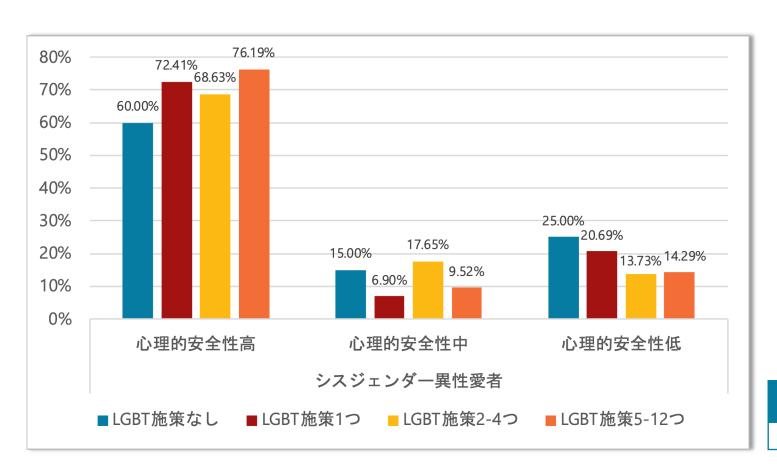


トランスジェンダーでも、シスジェンダーLGB+と同じく、LGBT施策の実施数が多いほど、職場の心理的安全性が高いと回答する人が多い。施策のない職場では42%が心理的安全性が低いと回答している。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	893	529	202	1,624



図2.10 心理的安全性 x 現状のLGBT施策の数, シス異性愛者

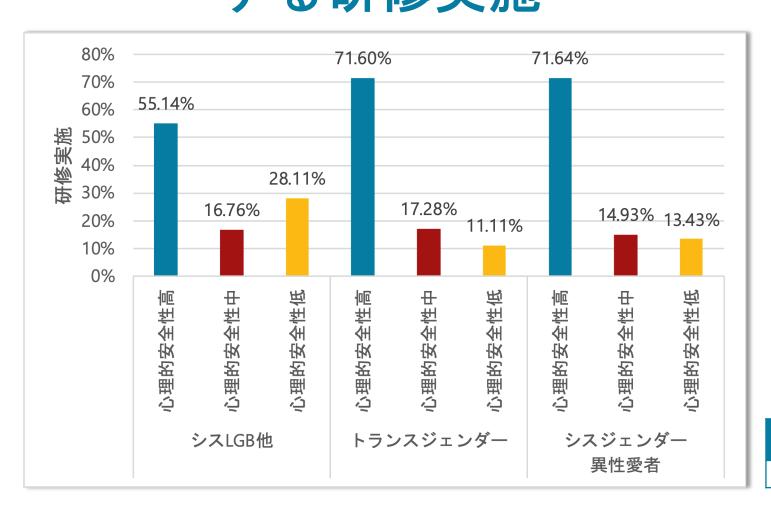


シスジェンダー異性愛者では、LGBT施 策がなくとも、職場の心理的安全性が 高いと回答する人が多い。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	893	529	202	1,624



図2.11 心理的安全性 x 性的マイノリティに関する研修実施



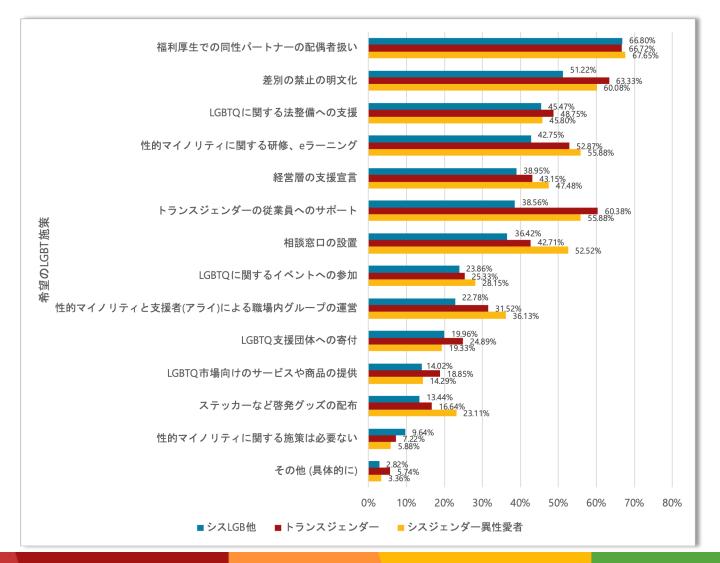
LGBTQに関する研修を実施した職場では、 心理的安全性が高いという回答が多い。

シスLGB+では心理的安全性が低いとの回答 も28%あり、脅威を感じないような研修の 工夫や、研修だけではなく、他の施策との 組み合わせの必要があると考えられる。

	シスLGB 他	トランスジェン ダ ー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	873	513	198	1,584



図2.12 希望のLGBTQ施策



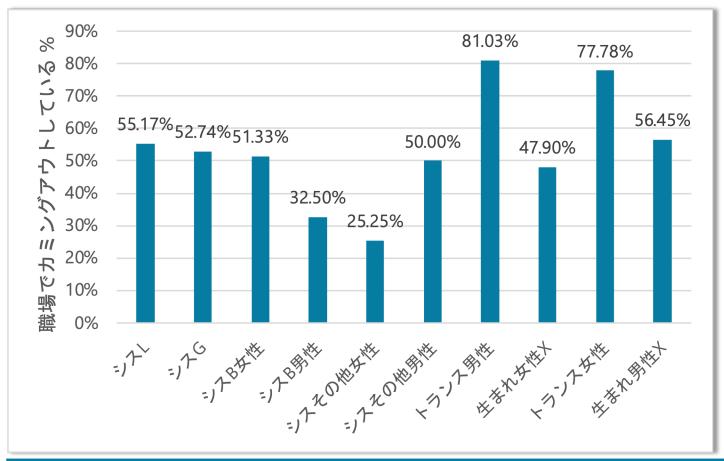
すべての属性で66%以上の回答者が、職場が同性パートナーを福利厚生に含めることを望んでいる。

差別禁止規定や、職場としてLGBTQに関する法整備への支援を望む声も多い。

			シスジェンダー	
	シスLGB他	トランスジェンダー	異性愛者	合計
N=	1027	679	238	1,944



図2.13 職場でのカミングアウト

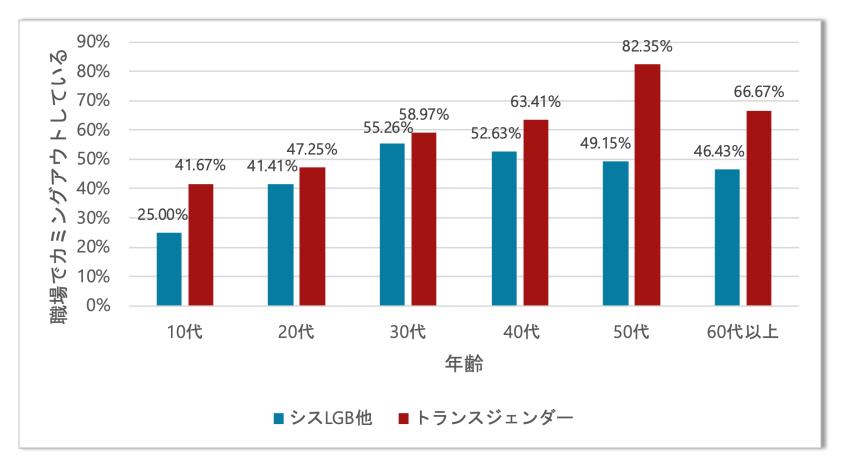


職場で少なくとも1人にカミングアウトしている人の割合は、トランスジェンダーの方が、シスジェンダーLGB+よりも高い。トランスジェンダー男性の81%、トランスジェンダー女性の78%が職場で誰かにカミングアウトしていると回答している。

	シスL	シスG	シスB女性	シスB男性							シス異性愛 女性		合計
N=	174	383	150	40	99	10	58	334	54	62	14	5	1,383



図2.14 職場でのカミングアウトx年代

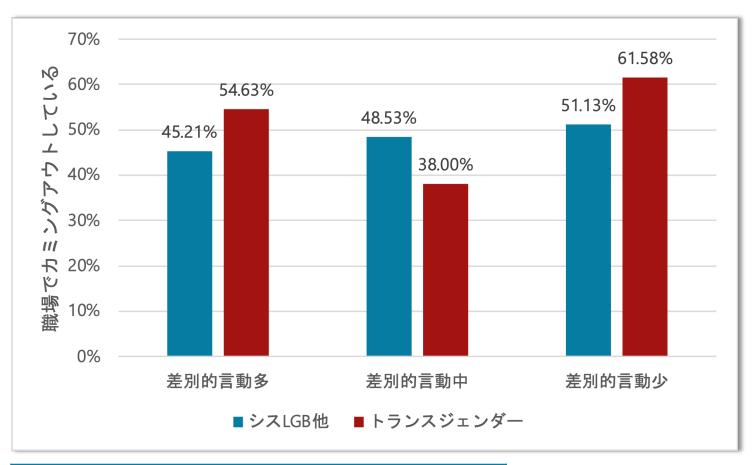


若い人の方が職場でカミングアウトしている、というわけではない。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	855	508	19	1,382



図2.15 職場でカミングアウトx差別的言動

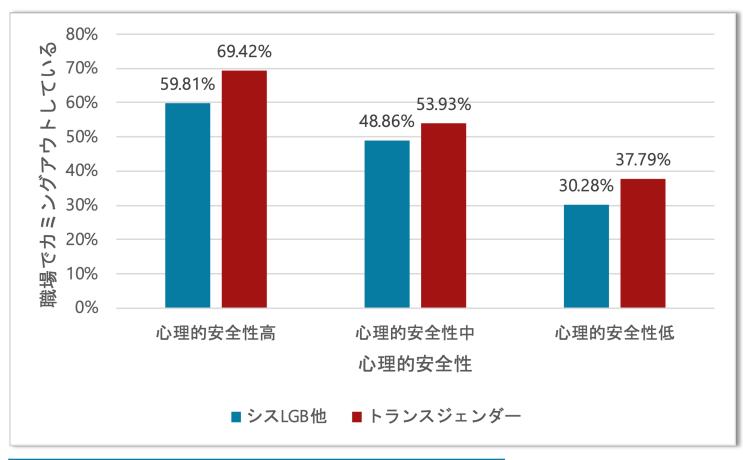


職場での差別が少ないと感じている場合、 多くのLGBTQが職場でカミングアウトして いる。対照的に、職場での差別的言動が多 い場合、職場でのカミングアウトの割合は 低下する。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	787	467	14	1,268



図2.16 職場でカミングアウトx心理的安全性

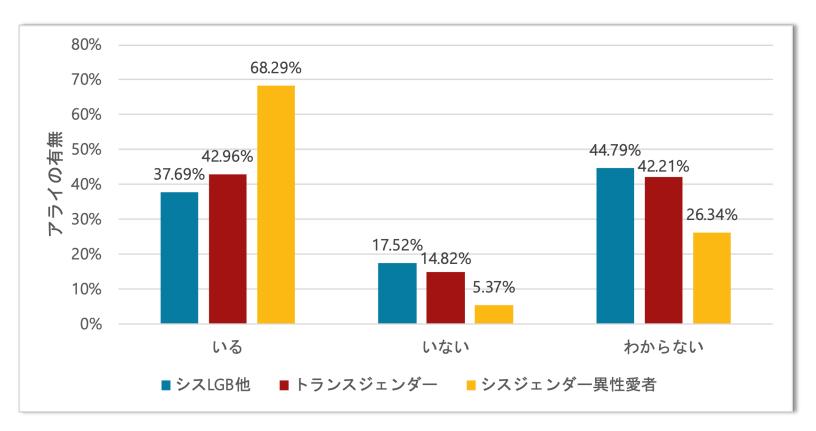


心理的安全性が高いと回答したLGBTQはカミングアウトしている人が多い。一方、心理的安全性が低い場合は、職場でカミングアウトしている人の割合はかなり低く、差別的言動より顕著に傾向が出ている。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	840	503	19	1,362



図2.17 職場でアライの有無

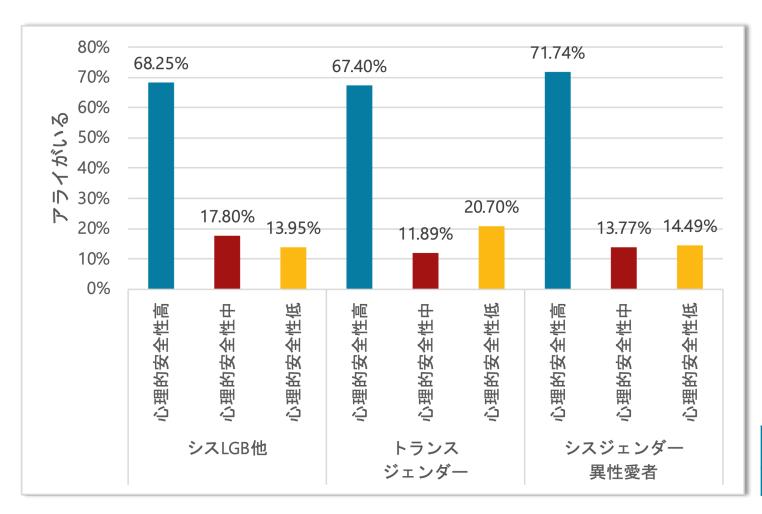


シスジェンダー異性愛者の回答者 (68%)は、LGBTQの回答者よりも、 職場にアライがいると回答している。 わからないと回答するLGBTQも多い。

	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	902	533	205	1,640



図2.18 心理的安全性 x アライの有無

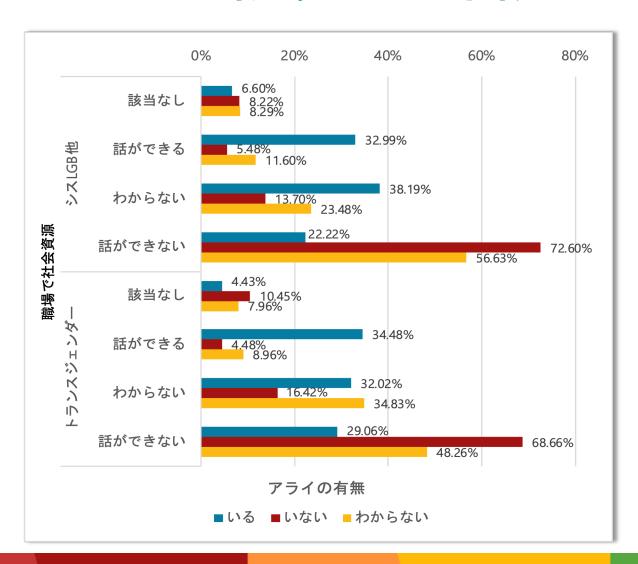


心理的安全性が高いと回答した人は、 職場にアライがいると回答している割 合が高い。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	892	529	202	1,623



図2.19 職場での相談x アライの有無

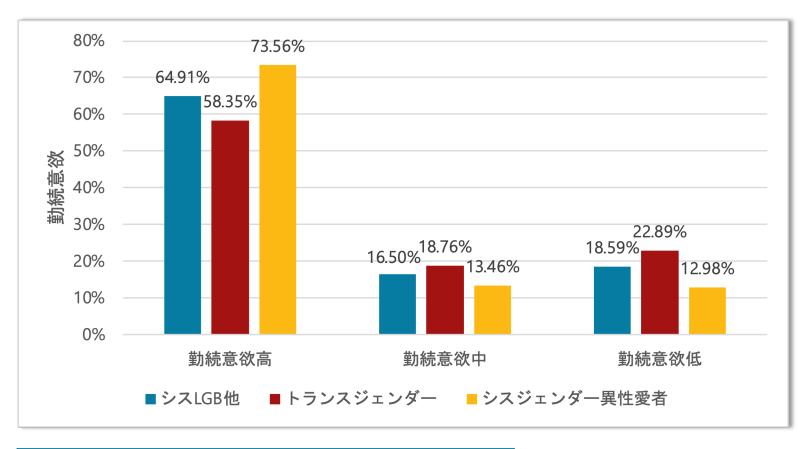


職場にアライがいないと思われる場合、シスジェンダーLGB+の73%、トランスジェンダーの69%が、職場の人に相談することができないと回答している。

	シスLGB 他	トランスジェン ダ ー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	796	471	171	1,438



図2.20 勤続意欲

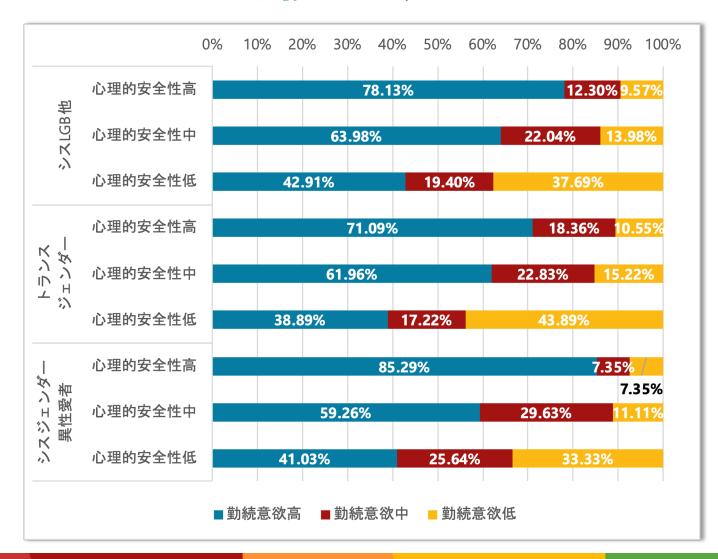


トランスジェンダーの回答者で現在の職場で働き続けたいと考える傾向が低い。

	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	909	533	208	1,650



図2.21 勤続意欲 x 心理的安全性



心理的安全性が高い職場では、勤続意欲も 高い。

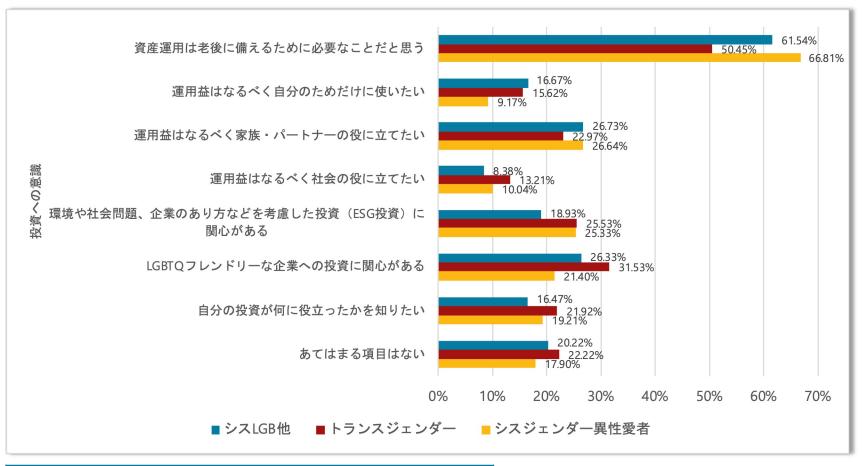
	シスLGB 他	トランスジェン ダー		合計
N=	893	528	202	1,623

3. 経済に関する調査結果

- 投資に対する理解や動機は、各属性で類似している(図 3.1参照)
- ・ 職場でLGBTQ施策が多いという回答者は、投資への関心 も高かった(図3.3参照)
- トランスジェンダー回答者は、ほぼすべてのケースでシスジェンダー回答者よりも貧困に関する経験が多い(図3.4参照)



図3.1 投資への意識



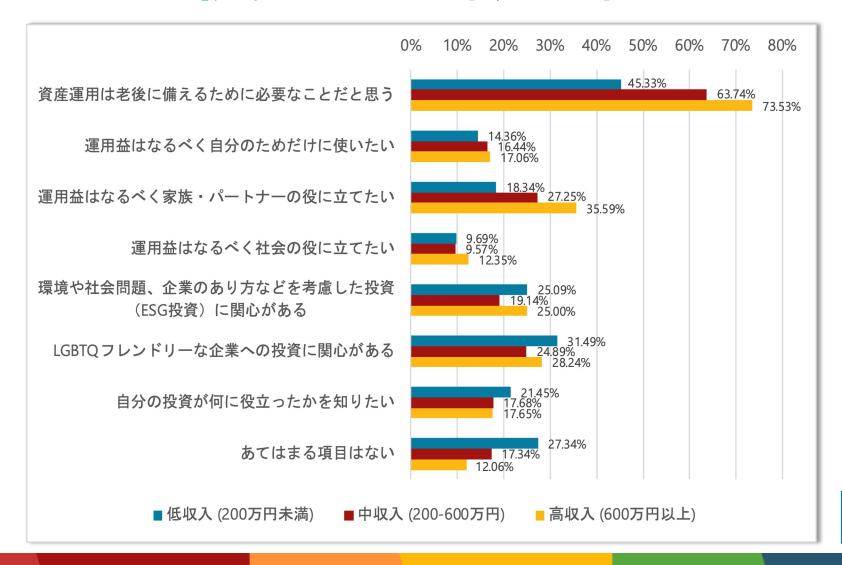
回答者の投資に対する考え 方は、SOGIによって大きな 違いはない。

LGBTQフレンドリーな企業 への投資への関心は21%-32%であった。

	シスLGB他	トランスジェンダー	シスジェンダー異性愛者	合計
N=	1165	773	304	2,242



図3.2 投資への意識 x 本人収入



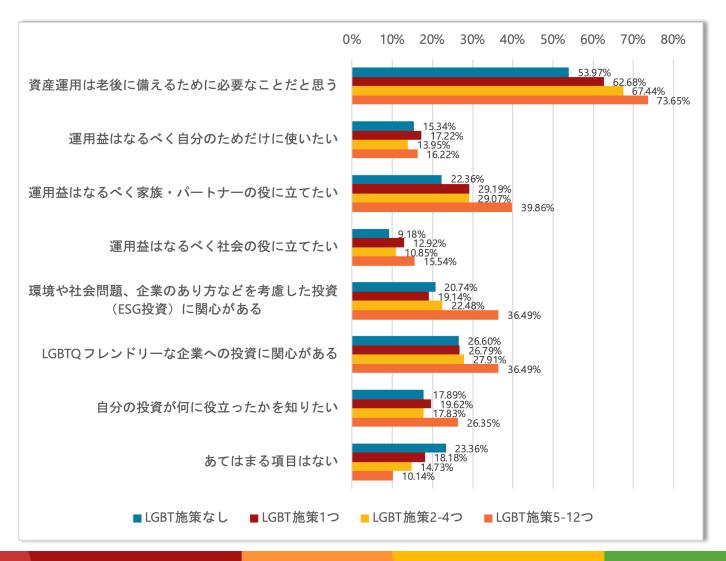
高所得者ほど投資への関心が高く、特に老後や家族のためと回答している。ついで、LGBTQフレンドリー企業へ投資、ESG投資への関心を示した。

低所得者(27%)は、中所得者(17%)、高所得者(12%)に比べ、投資に関する設問のいずれにも当てはまらないと回答した。

N= 1,806



図3.3 投資への意識 x 現状のLGBTQ施策の数

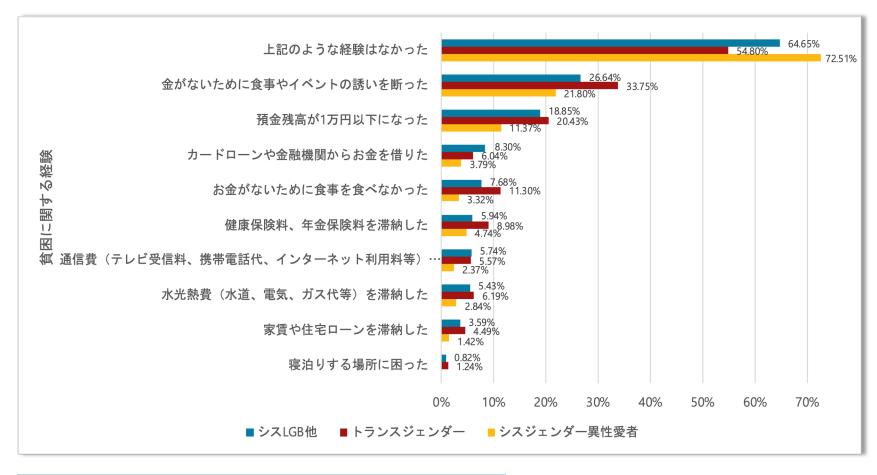


また、職場にLGBTQに関する施策が多くあると回答した回答者は、LGBTQに関する施策が少ないと回答した回答者に比べ、投資への関心も高い。例えば、職場にLGBTQに関する方針が5~12個あると回答した回答者の74%は、LGBTQに関する方針がない職場で働く回答者の54%に比べ、老後のために投資が必要だとも考えている。

N= 1,806



図3.4 貧困に関する経験



トランスジェンダーの回答者は、ほとんどすべてのケースで、シスジェンダーの回答者よりも貧困経験を多く報告している。

預金残高が1万円以下になった経験のあるトランスジェンダーは20%、シスLGB+で19%であった。

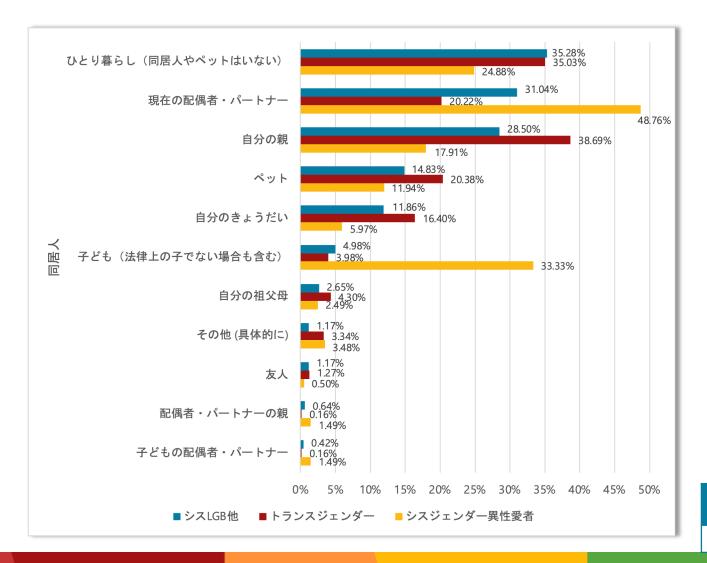
	シスLGB他	トランスジェンダー	シスジェンダー異性愛者	合計
N=	976	646	211	1,833

4. 社会に関する調査結果

- トランスジェンダーの回答者の62%が、現在の住まいからの引越を希望している(図4.2参照)
- LGBTQの回答者の90%以上が、誰かにカミングアウトしたことがある(図4.4参照)
- LGBTQの回答者の30%以上が、自分の考えや気持ちを話すことに、安全感や安心感が低いと答えている(図4.7参照)
- トランス女性(13%)とトランス男性(18%)が、アウティングされた経験がある(図4.9参照)
- ・ シス異性愛者の回答者は、LGBTQの回答者に比べて、差別的な発言や行為を見た回数が少ない(図4.11参照)



図4.1 同居人



LGBTQの35%が一人暮らしであるのに対し、 シス異性愛者の回答者は25%である。

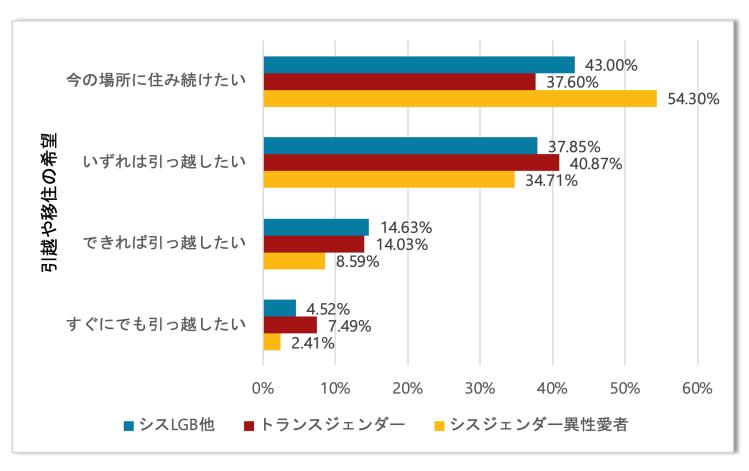
トランスジェンダーの回答者の39%が両親と同居しているのに対し、シスジェンダー 異性愛者の回答者は18%である。回答者の 年齢の影響があると思われる。

5%のシスLGB+、4%のトランスジェンダー が子どもと暮らしている。

•	他	ダー	者	合計
N=	944	628	201	1,773



図4.2 引越や移住の希望

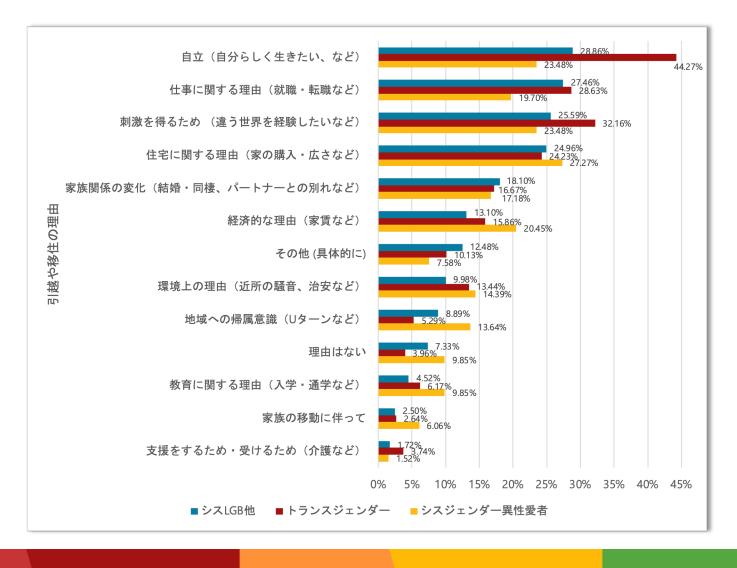


シスジェンダー異性愛者の回答者の54% が引越の希望がないのに対し、LGBTQの 方が引越の希望が高い。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	1128	734	291	2,153



図4.3 引越や移住の理由

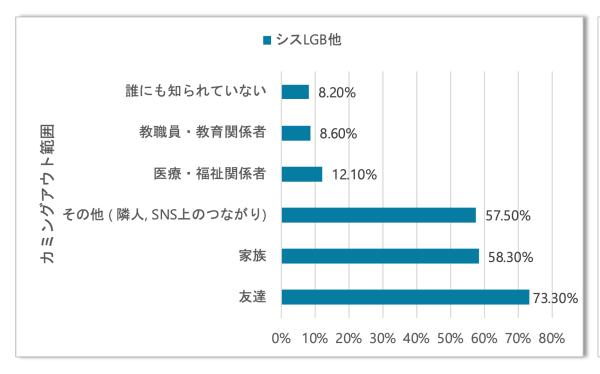


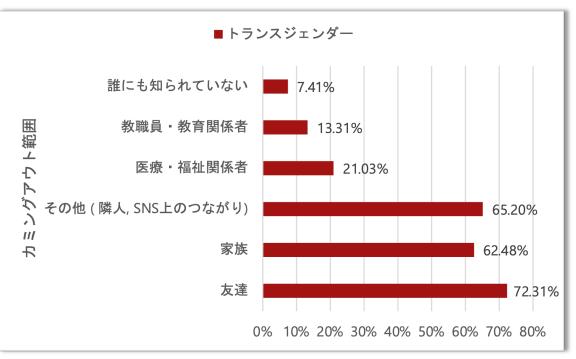
引越を希望する理由として、LGBTQでは自立(自分らしく生きたい)が最多回答であったが、シス異性愛者では住宅に関する物理的理由が最多回答であった。





図4.4 カミングアウト範囲



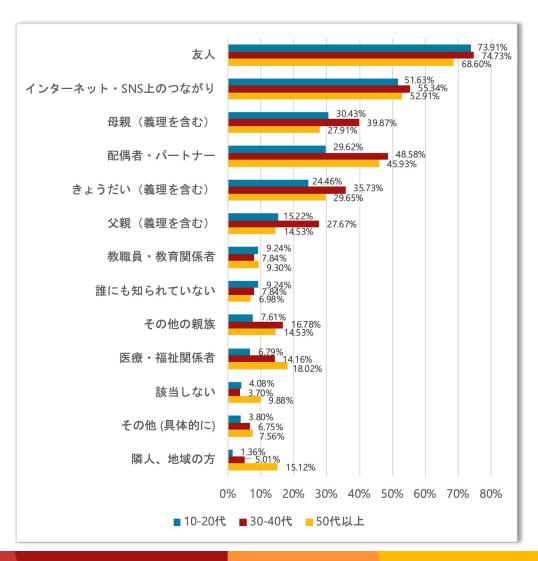


	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性 愛 す		合計
N=	1000	661	21	4	1,875

LGBTQの回答者の90%以上が、誰かにカミングアウトしたことがある。シスLGB+では8%、トランスジェンダーでは7%が、誰にもカミングアウトしていない。



図4.5 職場以外カミングアウトx年代, LGB+

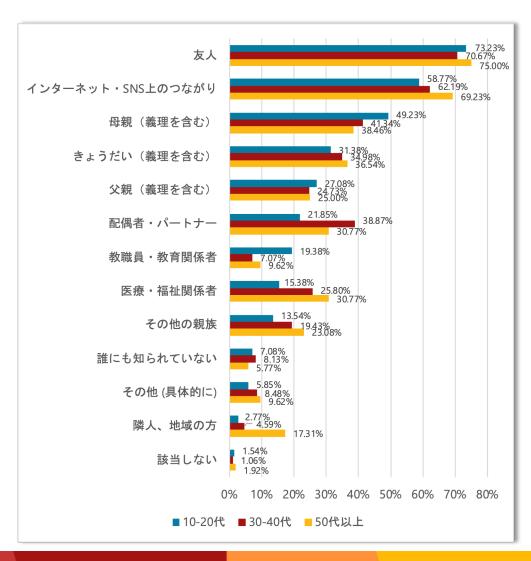


シスLGB+の場合、年代によって誰にカミングアウトしているか、違いが見られる。母親、父親にカミングアウトしている割合が高いのは30代~40代である。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	999	660	213	1,872



図4.6 職場以外カミングアウトx年代,トランス

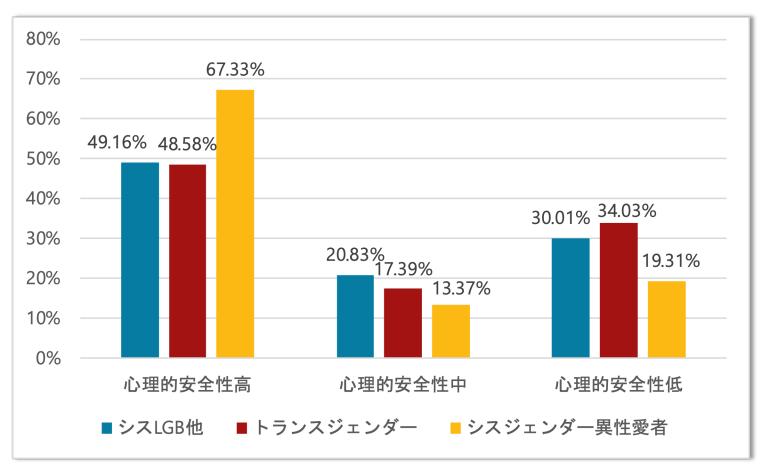


トランスジェンダーはシスジェンダーのLGB+回答者よりも社会的にカミングアウトしている割合が高く、特に医療・福祉関係者にカミングアウトしている割合が高い。母親、父親にカミングアウトしている割合が高いのは10代~20代である。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	999	660	213	1,872



図4.7 学校・職場の心理的安全性

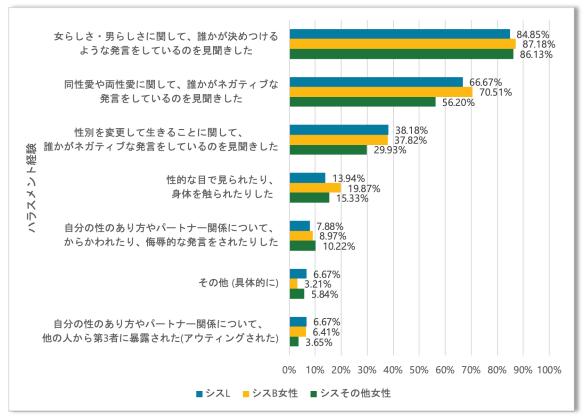


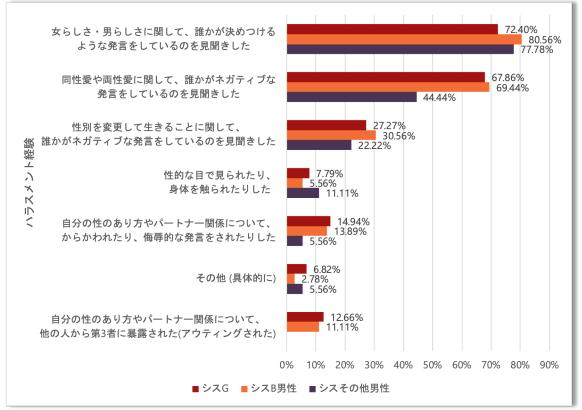
LGBTQの回答者の30%以上が、心理的 安全性(自分の考えや感情を安心して 話すことができる能力)が低いと回答 している。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	893	529	202	1,624



図4.8 学校・職場のハラスメント経験, LGB+



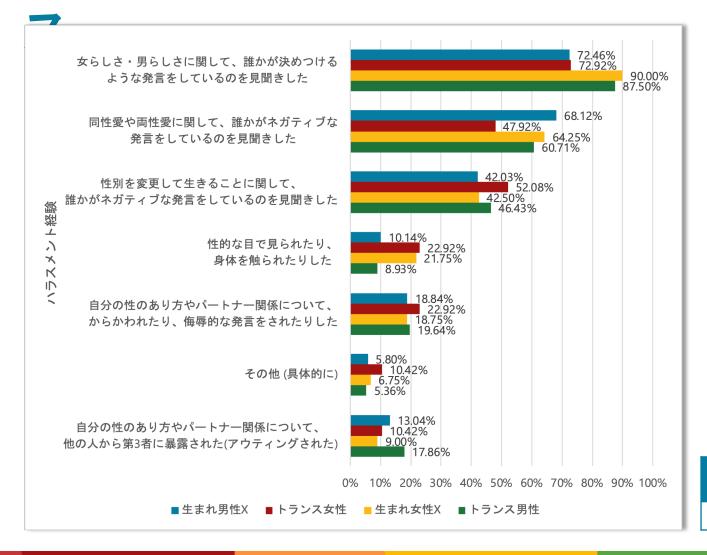


シスLB+女性は、シスGB+男性よりもジェンダーに関するハラスメントを多く経験している。アウティングに関しては、シスG(13%)の方が、シスL(7%)より多く経験している。

	シスL	シスG			シスその 他女性	シスその 他男性	合計
N=	165	308	156	36	137	18	1,566



図4.9 学校・職場のハラスメント経験, トラン

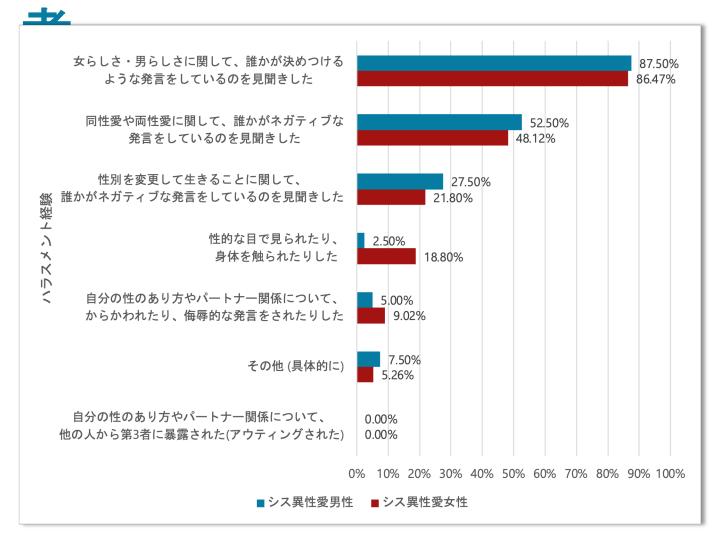


ジェンダーに関するハラスメントは、出生時に女性に割り当てられた回答者の方が経験している率が高い。アウティングはトランス男性の18%が経験している。

	トランス 男性	生まれ女性X	トランス 女性	生まれ男性X	合計
N=	56	400	48	69	1,566



図4.10 学校・職場のハラスメント経験, 異性愛

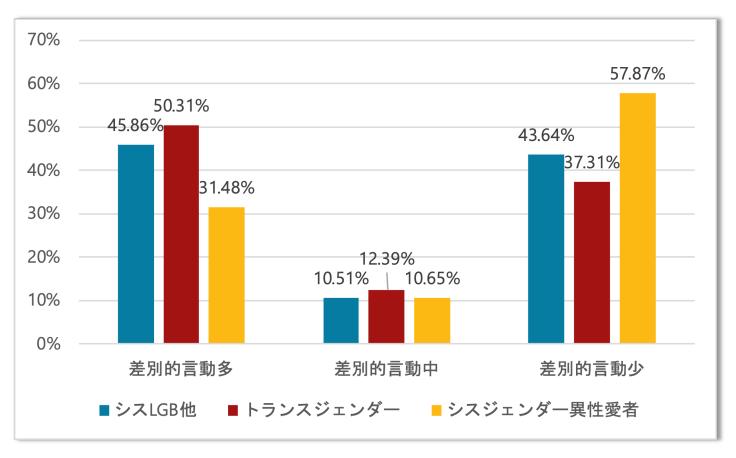


シス異性愛者では、男女ともほぼ同じようにハラスメントについて回答しているが、身体接触を伴うハラスメントは女性 の方が経験している。

	シス異性愛女性	シス異性愛男性	合計
1 =	133	40	1,566



図4.11 学校・仕事で差別的言動(頻度)

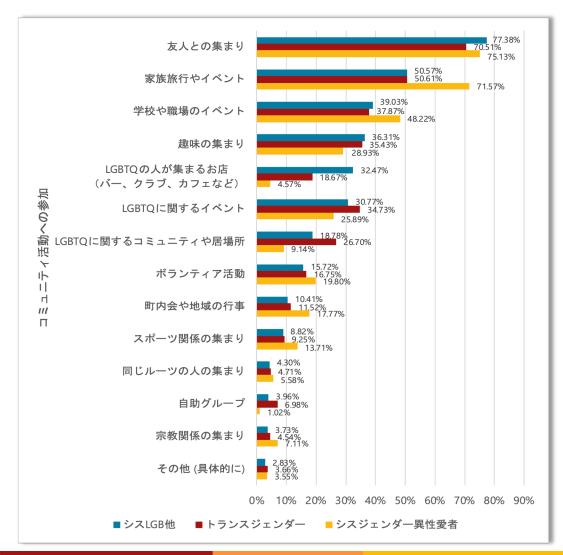


シスジェンダーLGB+(46%)とトランスジェンダー(50%)の回答者は、シスジェンダー異性愛者の回答者よりも差別的言動が多いと回答している。シス異性愛者の回答者の58%が、差別的言動は少ないと報告している。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー	-異性愛 者	合計
N=	990	654		216	1,860



図4.12 コミュニティ活動への参加



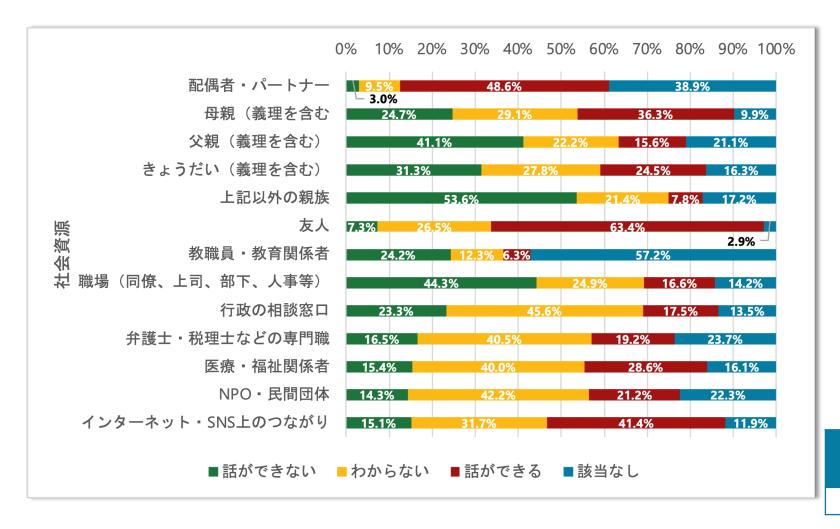
LGBTQとシス異性愛者では、社会的活動への参加の 状況が異なる。シス異性愛者の方が家族や学校・職 場、地域やスポーツの集まりに参加している。

所得階層別にも違いがあり、高所得者層は低所得者層よりも、家族旅行やLGBTQバー等によく行く傾向がある。LGBTQコミュニティセンター等を訪れる割合は、所得に関係なく同じである。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	884	573	197	1,654



図4.13 社会資源, LGB+

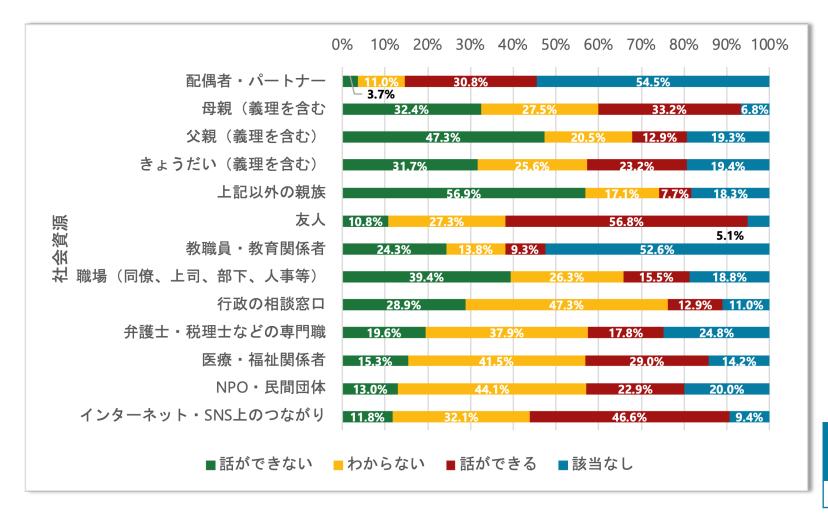


心配事や悩み事について、シス LGB+が最も話ができると回答した のは、友人、パートナー等、ネット 上のつながり等であった。

	シスLGB 他	トランス ジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	935	626	199	1,760



図4.14 社会資源,トランス



心配事や悩み事について、トランス ジェンダーが最も話ができると回答 したのは、友人、ついでネット上の つながり等であった。

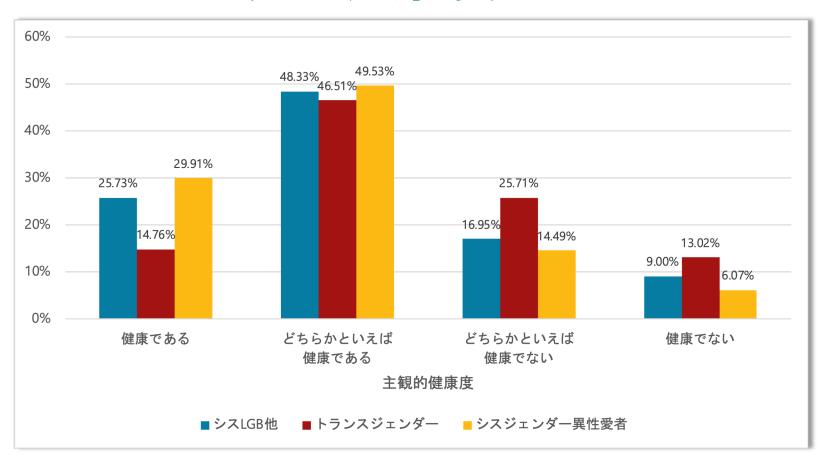


5. 健康に関する調査結果

- ・ LGBTQの方が、シスジェンダー異性愛者より主観的健康 度が低い(図5.1参照)
- LGBTQの回答者は、シスジェンダー異性愛者の回答者よりも、過去1年間に健康診断を受けた割合が低かった(図 5.3参照)
- ・ LGBTQの回答者は、シスジェンダー異性愛者の回答者と 比べて、メンタルヘルスの状況が悪い(図5.5参照)
- トランスジェンダーの回答者の多くが運動に対して障害を感じている。金銭的な問題(23%)と施設の問題(20%)が、特徴的である(図5.23参照)



図5.1 主観的健康度

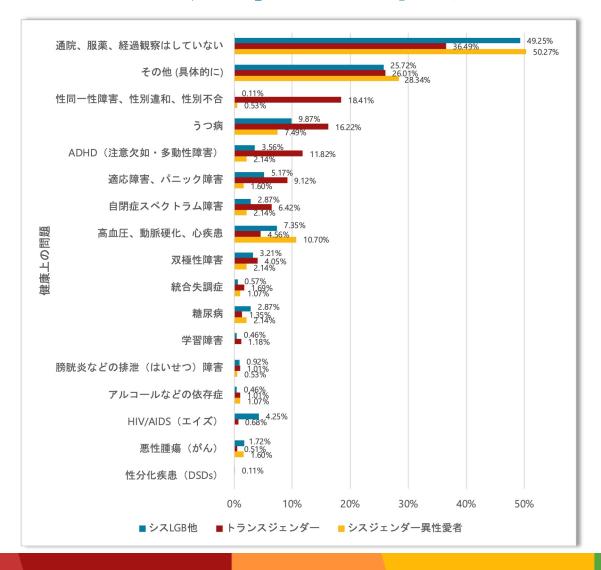


LGBTQの回答者は、シスジェンダー 異性愛者の回答者と比べて、自分の 健康状態を低く自己評価している。 シスジェンダー異性愛者の回答者の 30%に対し、シスジェンダーLGB+の 回答者の26%、トランスジェンダー の回答者の15%が健康だと感じてい ると答えている。

	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	956	630	214	1,800



図5.2 健康上の問題

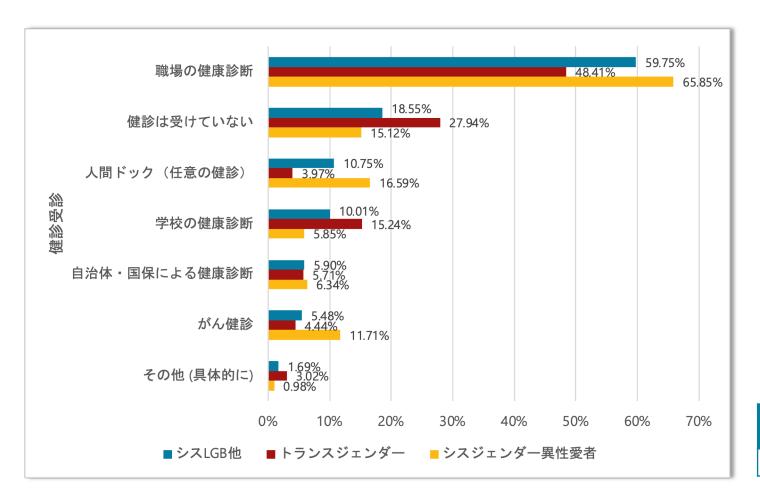


通院、服薬、経過観察をしていない人の割合は、トランスジェンダーで低く37%であり、逆に言えば、60%以上のトランスジェンダーが何らかの健康上の問題を抱えている状況である。うつや適応障害はトランスジェンダーが突出して多い。

	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	871	592	187	1,650



図5.3 健診受診



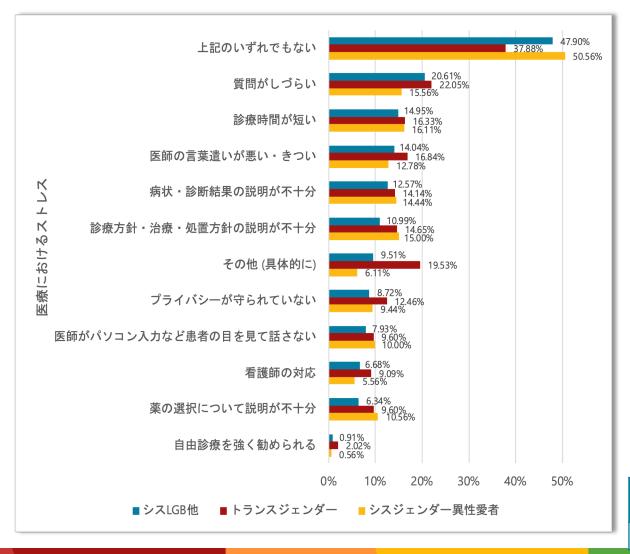
トランスジェンダーは、他の回答者に比べて健康診断を受けていない。

所得水準別にみると、低所得者の40%が健康診断を受けていないのに対し、中所得者では13%、高所得者では9%であった。健康診断を受けなかった回答者の35%が、メンタルヘルスに問題を抱えている(K6スケールで13~24点)可能性が高い。

	シスLGB他	トランス ジェンダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	949	630	205	1,784



図5.4 医療におけるストレス

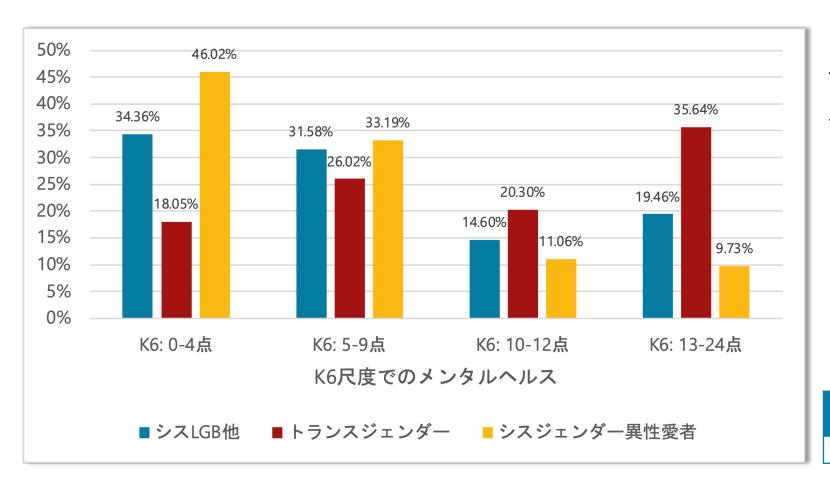


LGBTQの回答者の20%以上が、医療を受ける際のストレスとして「質問がしづらい」と答えている。

	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計	
N=	883	594	180	1,657	



図5.5 メンタルヘルス(K6)

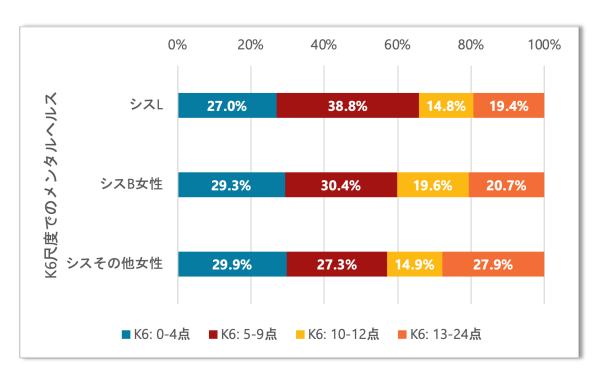


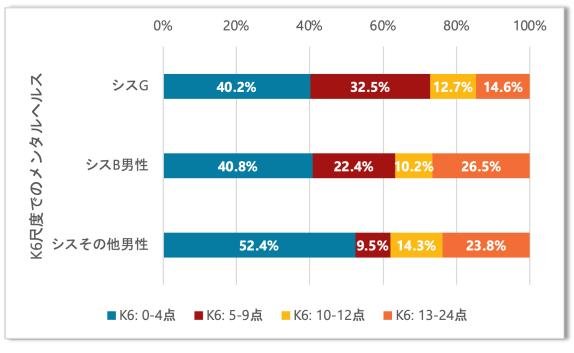
LGBTQの回答者は、シスジェンダー 異性愛者の回答者と比べて、K6尺度 でより高いレベルの心理的苦痛を報 告している。(うつなどの問題を抱 えている可能性が高い)

	シスLGB他	トランス ジェンダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	1,007	665	226	1,898



図5.6 K6尺度でのメンタルヘルス, LGB+



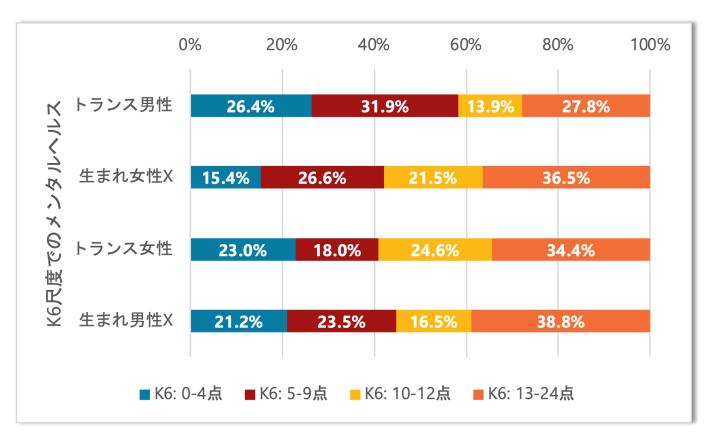


「シスその他女性」(28%)と「シスB男性」(27%)は、シスジェンダーLGB+の回答者の中で最も高いレベルの心理的苦痛(K6の範囲は13~24点)を表明している。

	シスL	シスG	シスB 女性	シスB男性	シスそ の他女 性	シスそ の他男 性	合計
N=	196	403	184	49	154	21	1,898



図5.7 K6尺度でのメンタルヘルス, トランス

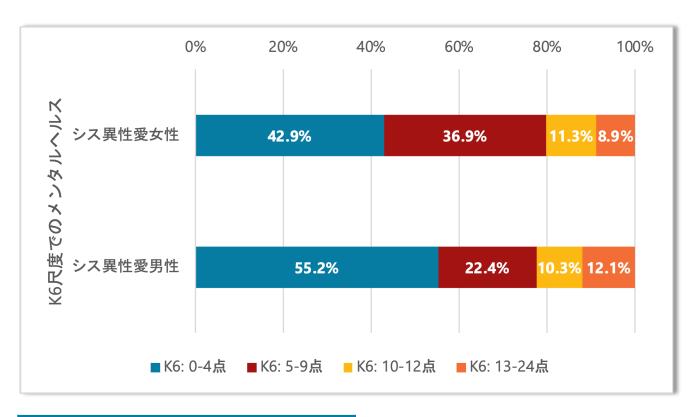


トランスジェンダー回答者のすべてのグループは、シスジェンダー回答者と比較して、より高いレベルの心理的苦痛を報告している。生まれ男性Xジェンダー(39%)と生まれ女性Xジェンダー(37%)は、トランスジェンダー回答者の中で最も高いレベルの心理的苦痛(K6の範囲は13~24点)を示している。

	トランス男 性	生まれ女 性X	トランス女性	生まれ男 性X	合計
N=	72	447	61	85	1,898



図5.8 K6尺度でのメンタルヘルス,シス異性愛

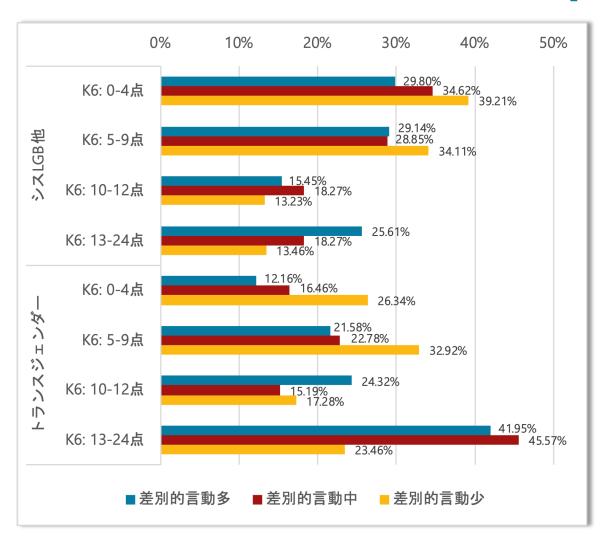


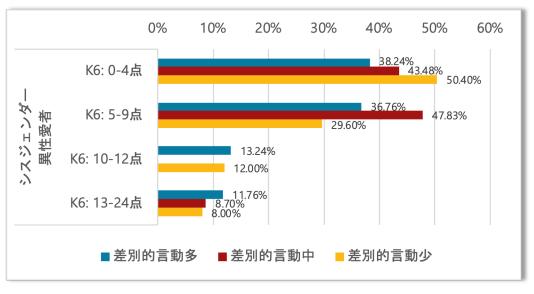
シスジェンダー異性愛者の回答者は、 LGBTQの回答者に比べて、K6尺度で心理 的苦痛のレベルがはるかに低いと報告し ている。

	シス異性愛女性	シス異性愛男性	合計
N=	168	58	1,898



図5.9 メンタルヘルス(K6) x 差別的言動



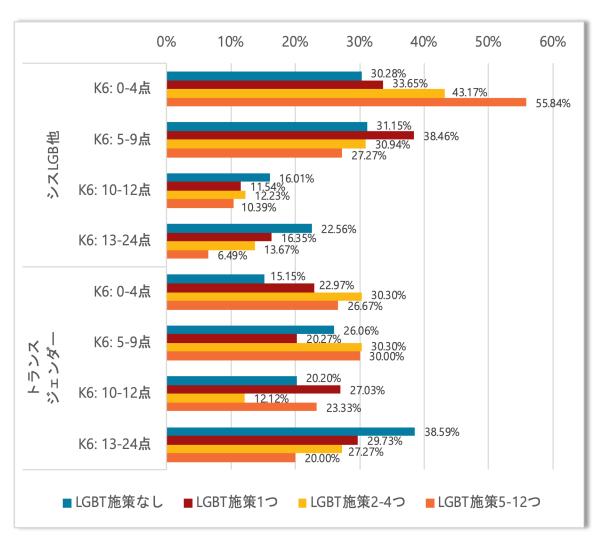


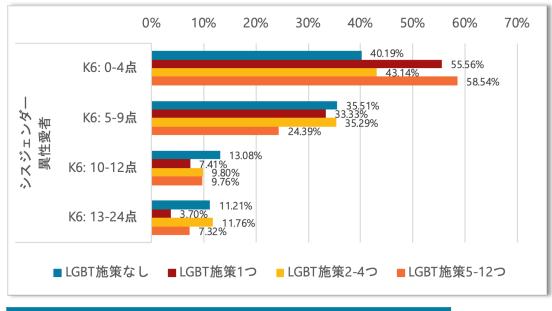
	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	988	651	216	1,855

シスLGB+は職場等で差別的言動がない方がメンタルヘルスが悪い人が少ない。トランスの場合も同様であるが、差別的言動が中程度以上の場合、42%以上という非常に高い割合でメンタルヘルスに問題を抱える可能性があり、早急な対応が求められる。



図5.10 メンタルヘルス(K6) x LGBTQ施策の数



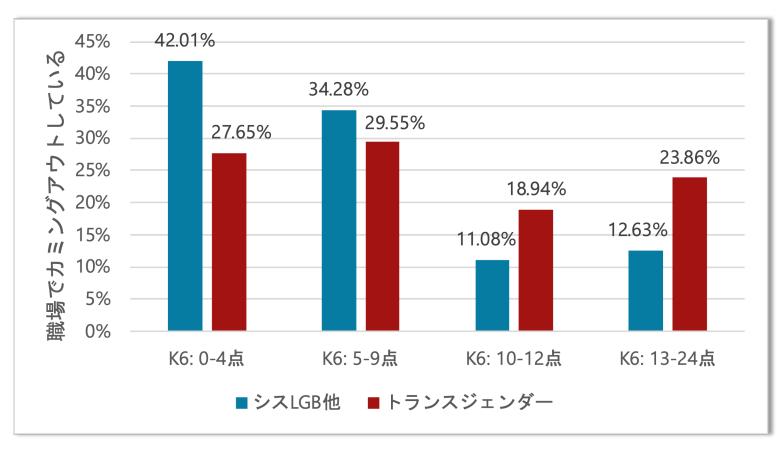


	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	1,007	665	226	1,898

LGBTQは職場等でLGBTQ施策が多い方がメンタルへ ルスが悪い人が少ない。



図5.11 メンタルヘルス(K6) x 職場カミングアウト

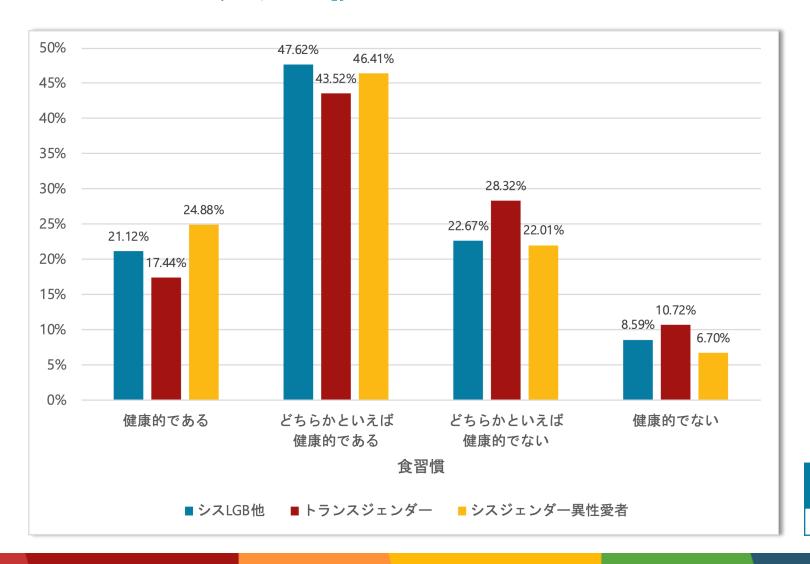


LGBTQは職場等でカミングアウトしている方がメンタルヘルスが悪い人が少ない。(カミングアウトしていない人も含めると、K6 13点以上の割合はシスLGB+19%、トランス 36%)

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	800	473	15	1,288



図5.12 食習慣

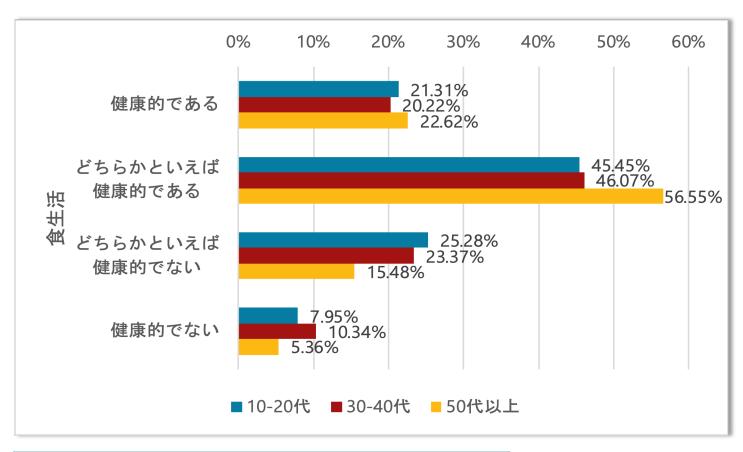


LGBTQの回答者は、シスジェンダー 異性愛者の回答者と比べて、自分の 食習慣が健康的でないと自己評価し ている。シスジェンダー異性愛者の 回答者の25%に対し、シスジェン ダーLGB+の回答者の21%、トランス ジェンダーの回答者の17%が、自分 の食習慣は健康的だと感じていると 答えている。





図5.13 食生活 x 年代, LGB+

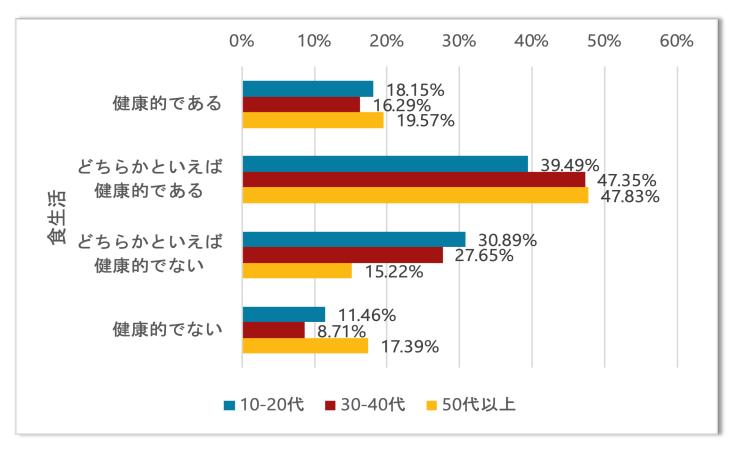


LGB+では若い世代の方が健康的な食生活ではないと回答している。(一般的な傾向と合う)

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	965	624	208	1,797



図5.14 食生活 x 年収, トランス

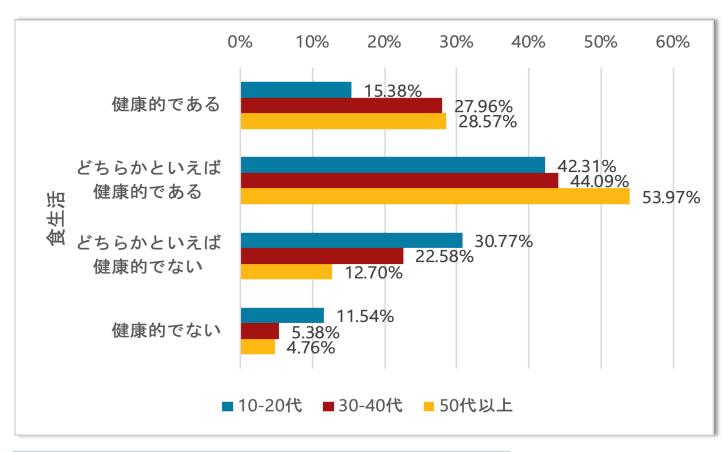


トランスジェンダーでは50代以上でも健康的な食生活ではないという回答が多い。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	965	624	208	1,797



図5.15 食生活 x 年収, 異性愛者

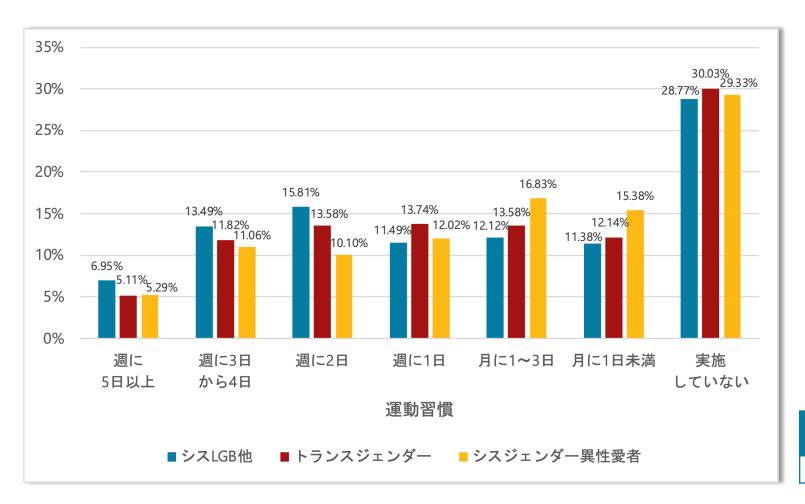


シス異性愛者では若い世代の方が健康的な食生活ではないと回答している。(一般的な傾向と合う)

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	965	624	208	1,797



図5.16 運動習慣



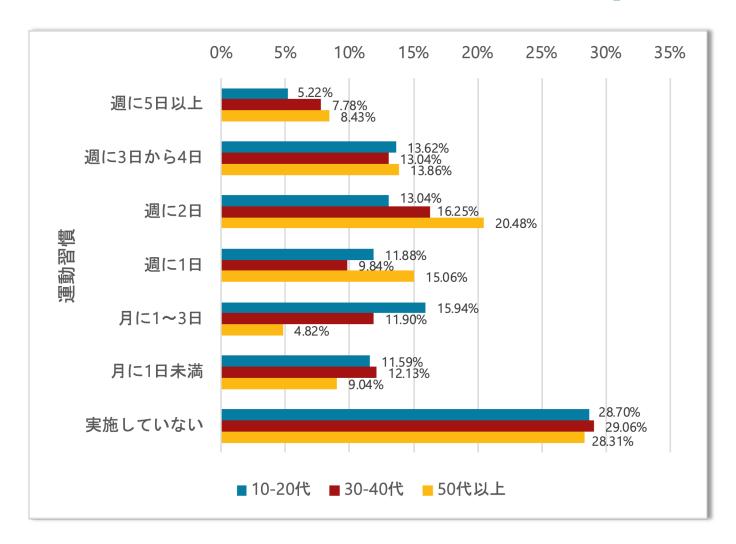
運動習慣について大きな違いはない ものの、シスジェンダーLGB+の人は 運動頻度がやや高い。

今回、トランスジェンダーの回答者は若い世代が多いため、一般的には最も頻度が高く出るはずであるが、 そうなっていない。

	シスLGB他	トランス ジェンダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	949	626	208	1,783



図5.17 運動頻度 x 年代, LGB+

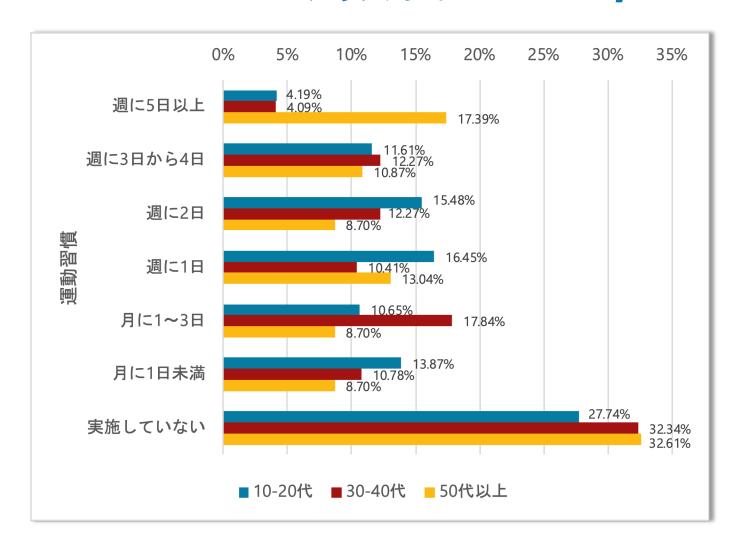


LGB+では、50代以上の運動頻度が高いことが特徴的である。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	948	625	207	1,780



図5.18 運動頻度 x 年代, トランス

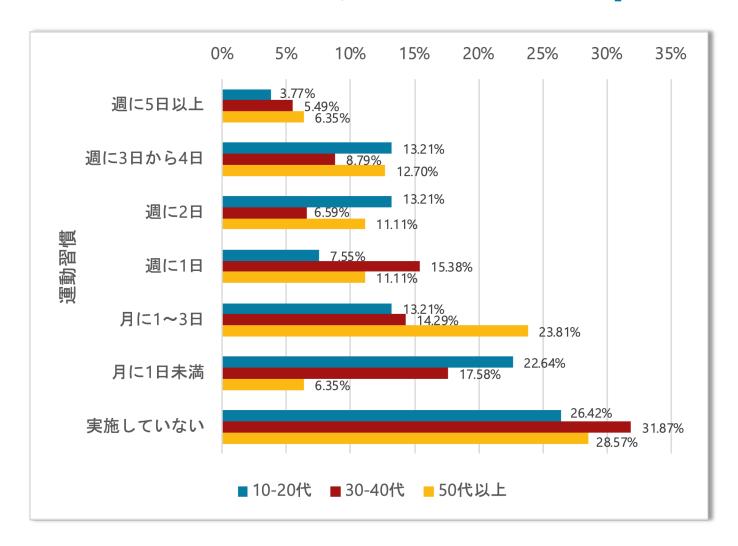


トランスジェンダーでは、週に2日程 度運動している人は、年代が進むご とに少なくなる。若い世代は体育の 授業などがある可能性がある。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	948	625	207	1,780



図5.19 運動頻度 x 年代, 異性愛者

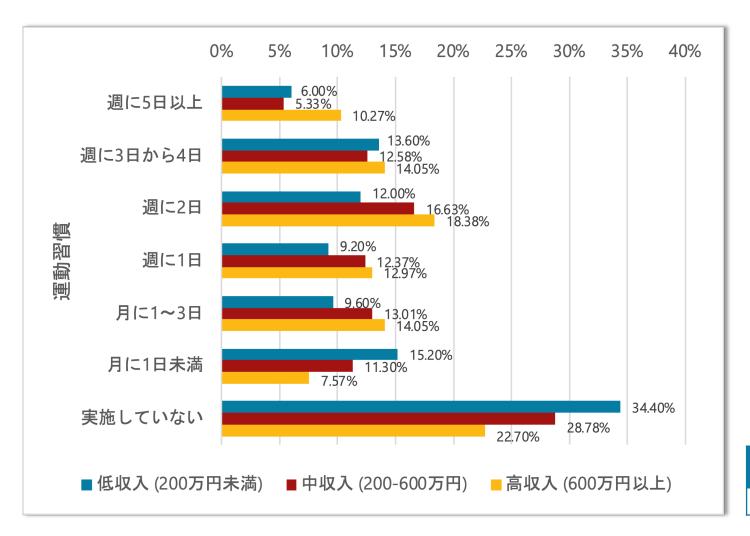


シスジェンダー異性愛者の回答者は、30代と40代が最も運動量が少ない。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	948	625	207	1,780



図5.20 運動頻度 x 本人収入, LGB+

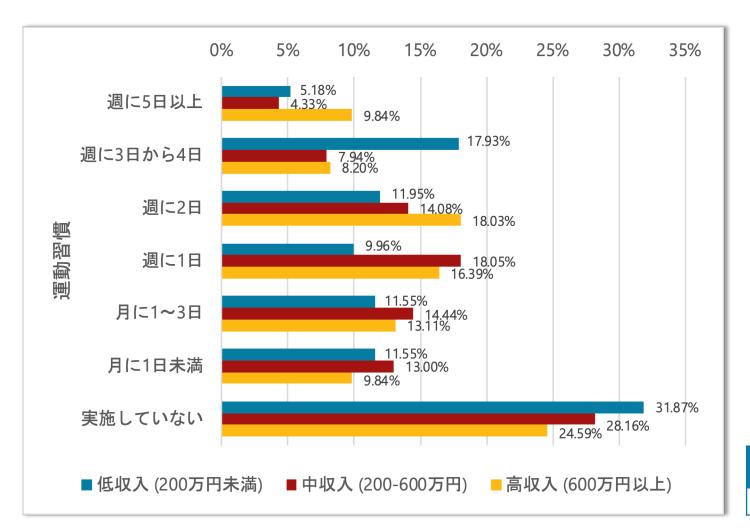


LGB+では、高年収の人は、運動を実施していない、週に2日程度運動しているという人が多く、低年収の人は34%が運動を実施していない。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	904	589	200	1,693



図5.21 運動頻度 x 本人収入, トランス

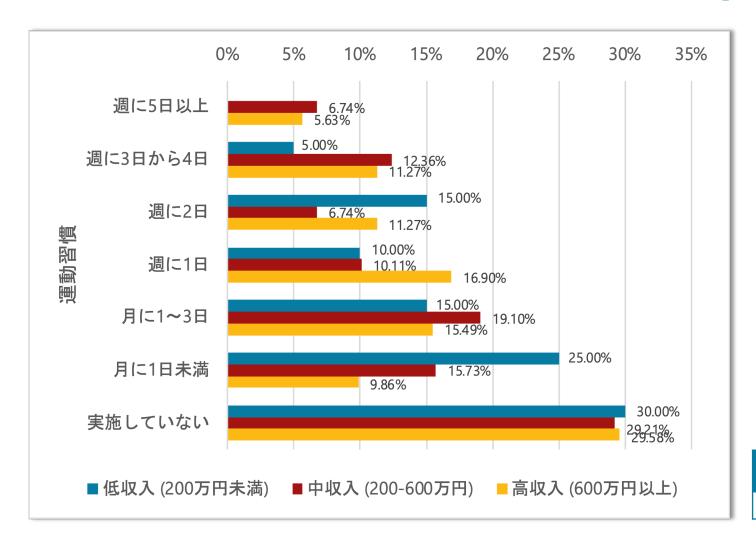


トランスジェンダーでは、低年収の人は32% が運動を実施していないが、低年収の人も 18%が週に3日から4日の運動をしている。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	904	589	200	1,693



図5.22 運動頻度 x 本人収入, 異性愛者

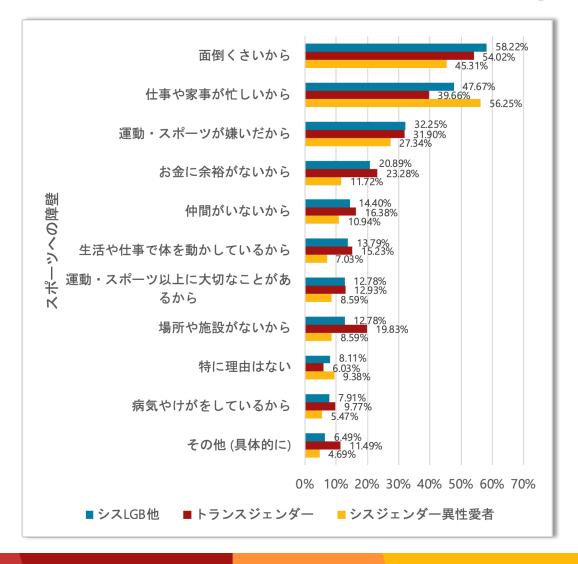


シスジェンダー異性愛者では、運動を実施していない比率に年収による影響はない。

	シスLGB 他	トランスジェン ダー	シスジェンダー 異性愛者	合計
N=	904	589	200	1,693



図5.23 スポーツへの障壁

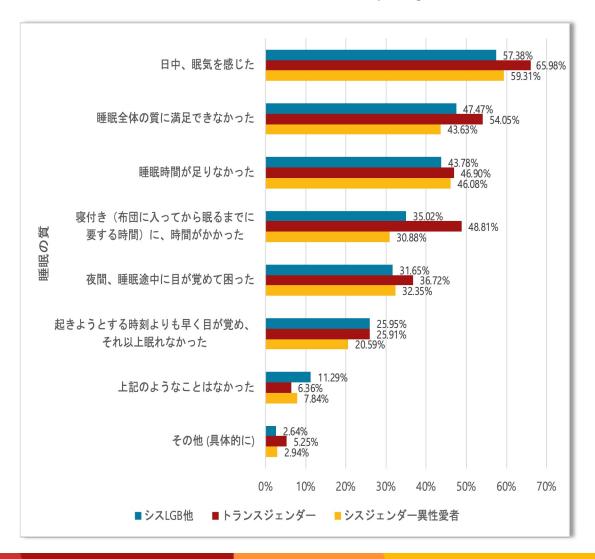


運動をすることへの障壁を聞くと、トランスジェンダーで金銭的な余裕や場所や施設の問題をあげる人が多かった。

	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	493	348	128	969



図5.24 睡眠の質



睡眠に問題を抱えていないという人は少ない。特に トランスジェンダーの回答者は、シスジェンダーの 回答者よりも睡眠の質に対する不満のレベルが高い。

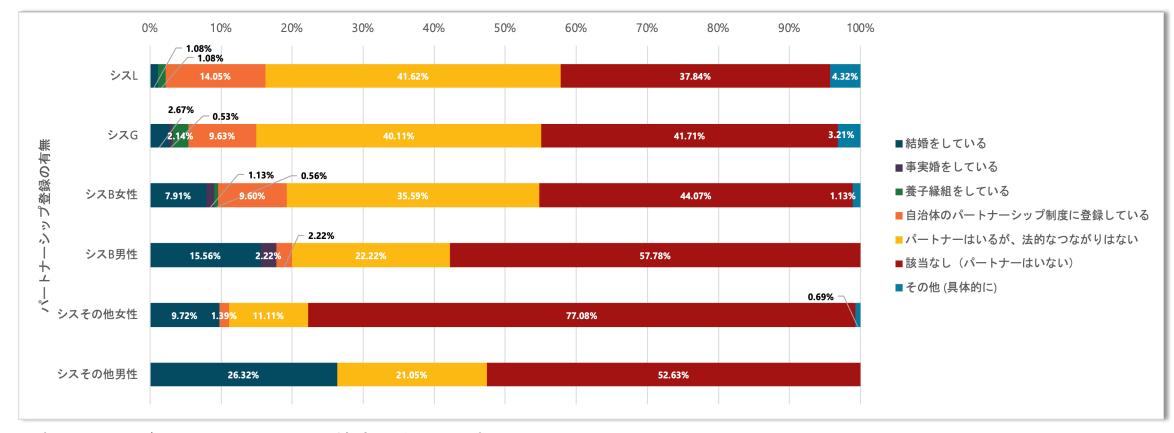
	シスLGB他	トランスジェン ダー	シスジェンダー異性愛 者	合計
N=	948	629	204	1,781

6. パートナーシップに関する結果

- LGB+の回答者(図6.1参照)の約半数、トランスジェンダー(図6.2参照)の約60%がシングルである(図6.3参照)
- ・ パートナーを持つLGBTQの回答者の大多数は、パートナーとの法的関係を持たない。結婚しているケースは、「シスジェンダーのその他男性」が26%でトップ。「シス・レズビアン」はパートナーシップ登録制度の利用率が14%と最も高い(図6.1参照)
- パートナーシップ登録証明書を取得した人でも、何からの形で実際に利用しているLGBTQは非常に少ない。シスジェンダーLGB+の25%、トランスジェンダーの36%が、まったく利用する機会がないと回答した(図6.4参照)



図6.1 パートナーシップ登録の有無,LBG+

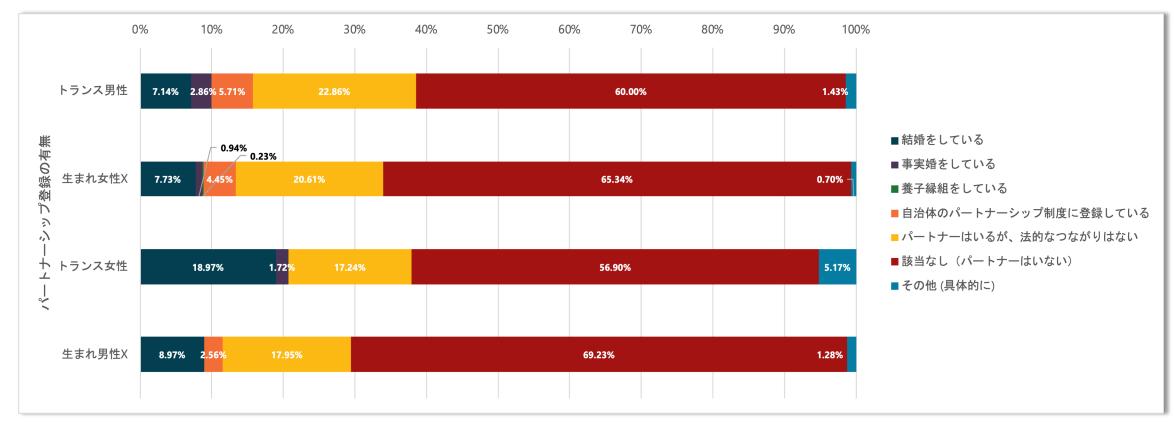


パートナーがいるシスLGB+の回答者のうち、パートナーとの法的なつながりはないと答える人が多い。例えば、レズビアン女性の42%、ゲイ男性の40%がパートナーはいても法的なつながりはない。

	シスL	シスG	シス B 女性	シスB男性	シスその 他女性		合計
N=	185	374	177	45	144	19	1,778



図6.2 パートナーシップ登録の有無,トランス

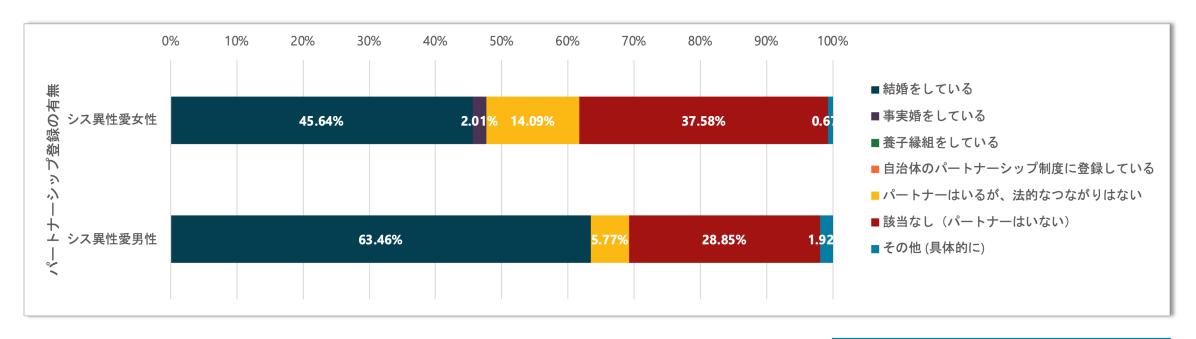


トランスジェンダーの回答者の約60%はパートナーがいない。パートナーがいる人のうち、平均して19%はパートナーとの法的なつながりがない。トランス女性は19%が結婚をしている。

	トランス男性	生まれ女性X	トランス女性	生まれ男性X	合計
N=	70	427	58	78	1,778



図6.3 パートナーシップ登録の有無, 異性愛者

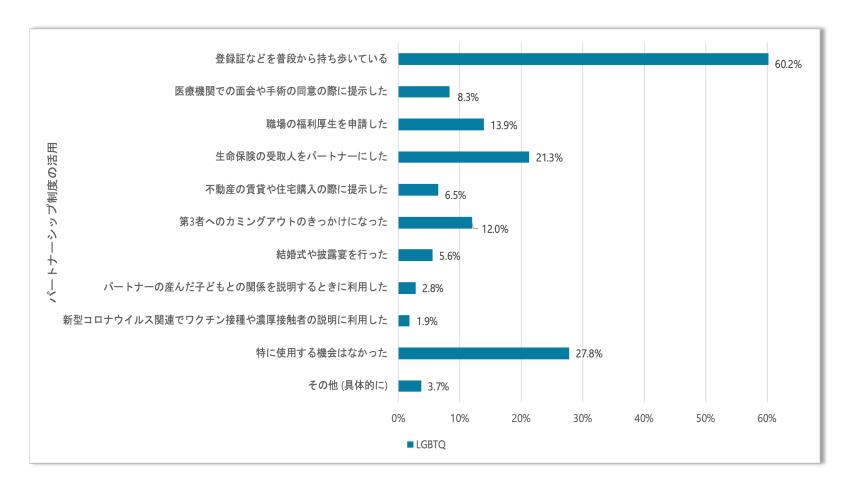


シスジェンダー異性愛者の回答者は、パートナーがいて、 結婚している割合がLGBTQより高い。

	シス異性愛女性	シス異性愛男性	
N=	149	52	1,778



図6.4 パートナーシップ制度の活用



パートナーシップ登録をしている 108人のうち、60%がパートナー シップ登録証を普段から携帯している。しかし、28%は特にカードを使う機会がなかったと回答している。



付記

調査方法とnijiVOICE調査内容に関する補足説明



性的マイノリティをテーマとする調査の様々な手法

全国無作為抽出調査 例:家族と性と多様性にかんする全国アンケート

- 確率標本:日本在住すべての個人が等確率で選ばれる仕組み、「くじびき」や「サイコロ」のように、誰が調査対象者として選ばれるかを偶然にゆだねる
- 日本在住の人々の実態の正確な縮図になるような設計
- マイノリティの実態については分かりにくい

オープン型ウェブ調査 例:nijiVOICE 2023, Aro/Ace調査2022, B/P実態調査

- 非確率標本:調査実施者が広報を行い、協力者を集める
- 集まった回答は社会全体の正確な縮図にはならない
- 調査テーマに強い関心を持つ層が自発的に回答するため、無作為抽出では把握困難な人口層の実態を捉えることができる

クローズド型ウェブ調査 例:電通ダイバーシティ・ラボによる「LGBTQ+調査」

- 非確率標本:ウェブ調査会社が自社に「モニタ」として登録している人が調査対象になる、謝礼が付与されるため無関心層や非マイノリティも回答
- 調査会社モニタの人口学的特徴は日本社会の全体像の正確な縮図になっているとは言えない、大規模調査の場合はマイノリティ にもリーチ可能



アンケート冒頭のただし書き

niji VOICE 2023 ~LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査~

このアンケートは、性的マイノリティの仕事や暮らしの状況を明らかにするための調査です。心身の健康や周囲の人との関係についての質問もあります。学生(満15歳以上)や現在働いていない方、性的マイノリティの当事者以外の方も回答することができます。正解、不正解はありませんので、思ったままをお答えください。

お答えいただいた内容は個人が特定されない形で集計結果として取りまとめられ、ホームページなどで公開予定です。

【事前に必ずお読みください】

- ・アンケートの対象者は、日本で暮らした経験のある満15歳以上の方です。
- ・この調査への回答は任意です。本ページ下部にあるボタンへのクリックをもって、このアンケートへの協力に同意したもの とさせていただきます。
- ・回答項目は<u>最大で52問</u>あり、標準的な<u>回答時間は10分~25分</u>です。
- ・パソコン端末、スマートフォン、タブレット端末から回答可能です。
- ・前の設問に戻りたいときは「前へ」ボタンを押してください。ブラウザの「戻る」ボタンは使わないようご注意ください。
- 一つの端末からは一度しか回答できません。
- ・仕事に関する質問は、アルバイトなどの非正規雇用も含みます。
- ・現在働いていない方は、直前の職場についてお答えください。
- ・複数の職場を持っている方は、主な職場についてお答えください。
- ・現在の職場が海外の方は、直前の日本での職場についてお答えください。
- ・過去の職場、副業的な職場に関するエピソードや調査に対する意見を記載したい場合は、最後の自由記載欄に記載してください。
- ・あなたの名前や学校名、会社名などを記入する箇所はありません。
- ・どうしても答えたくない質問がありましたら、飛ばして次に進んでいただいて構いません。
- ・人権を著しく傷付ける目的だと思われる記載があった場合は、分析対象から外すことがあります。
- ・本アンケートの最終ページで、LGBTQに関する相談窓口をご紹介します。個別の労働相談、生活相談などはそちらをご利用ください。



設問(全52問)

属性	学校や職場等	財源	社会的	健康	パートナーシップ /その他
年齢	就業状況	投資への意識	同居人	メンタルヘルス(K6)	パートナーシップ登録の有無
出生時の性別	就業形態	貧困に関する経験	生活上の困りごと*	主観的健康度 *	パートナーシップ制度の活用
性自認・ジェンダー自認	職場従業員数		引越や移住の希望 *	健康上の問題 *	感想
学校・職場での性別	職業		引越や移住の理由 *	食事*	メールアドレス
性的指向・アイデンティティ	職種		カミングアウト範囲	食事に関しての思い*	
決めたくない・決めていない	カミングアウト範囲(職場)		心理的安全性	運動習慣 *	
性的指向(好きになる性別)	現状のLGBT施策		学校・職場のハラスメント経験	スポーツへの障壁 *	
恋愛的指向(恋愛感情)	希望のLGBT施策		差別的言動(頻度)	運動やスポーツに関して の思い *	
都道府県	勤続意欲		コミュニティ活動への参加 *	睡眠 *	
国籍 *	アライの有無		社会資源	健診受診 *	
ルーツ *	労働時間			医療におけるストレス*	
学歴					
本人収入			* 2023から、新規の設問		
世帯年収			** 設問によって分岐の設定	定もあり	

終わり